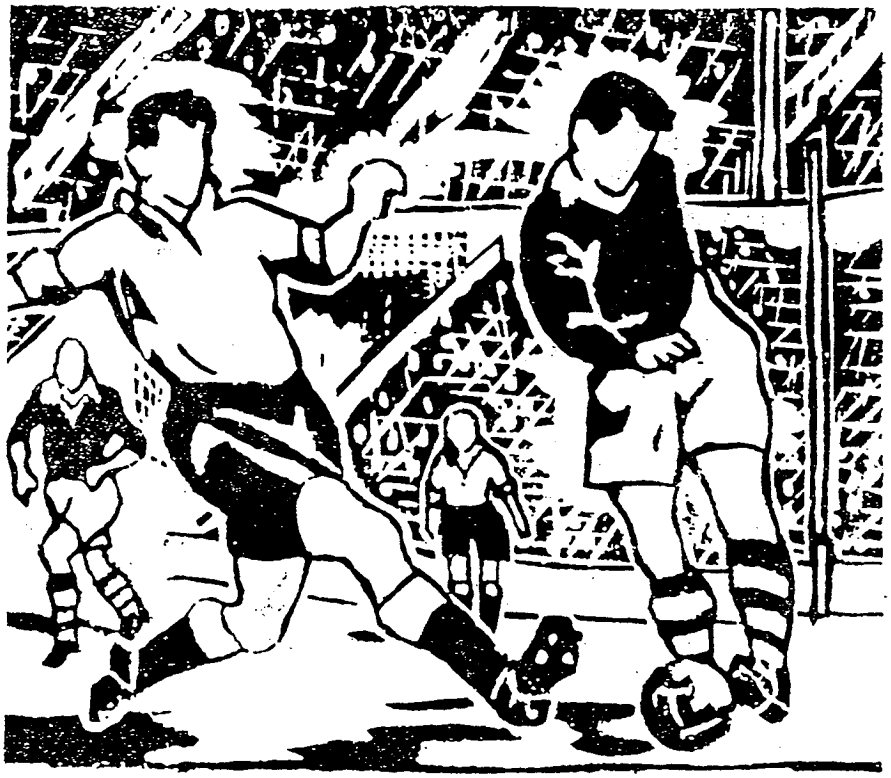
闘魂



東大サッカー部誌

2号

日本蹴球協会　公認球

World's Cup

◉ 東京オリンピック唯一の使用球
◉ 国際試合，国内大学リーグ使用球

¥ 3,800

日本蹴球協会公認球

MIKUNI 6.5 ¥ 3,800

日本サッカーリーグ使用球

白黒３２枚型縫い練習球

MIKUNI S.T号 ¥ 3,300

一流大学・高校使用球

サッカー用服装も皆ミクニです

全日本代表チームから少年サッカースクールまでミクニで活躍中

お知らせ下さいサッカー用カタログお送りします

ミクニ

40余年サッカー用品専門の店

㈱ミクニ商会

東京都千代田区外神田３丁目２番２号
TEL (251) 4931(代表)～３

目次

巻頭言

闘魂二号発刊に当って……小西敏夫……一
部長渡辺武男……二

OB寄稿

サッカーの栄光のために……新田純興（大正十一年卒）……四
スポーツとは自分にとって何であるか……中村陽吉（昭和二年卒）……六
これだけはやってくれ……大内弘（昭和十二年卒）……八
再び苦言を
―監督を去るに当り―……監督須賀敏孝（昭和十九年卒）……九
監督を引き受けるの弁……新監督岡野俊一郎（昭和三十一年卒）……一一
御殿下クラブ……中浅見俊雄（昭和三十一年卒）……一二
スポーツマンの効用と限界について……安村紀雄（昭和三十八年卒）……一三
達二郎（昭和三十九年卒）……一五

部員寄稿

主将失格……四十二年度主将　小川恭二……一七
駒沢十一月五日……小西敏夫……一七
青春……小林将志……一九
コンプレックス……中井省……二〇
納会……主務　中尾捷……二〇
五年にして去るにのぞみ……熊谷貞俊……二一
アメリカでのサッカー……諏訪勝久……二二
ユートピアニズムとリアリズム……坂井忠昭……二三
相手のミスにはガメツク！……石田祐幸……二五
ちょっとキザ……大塚隆……二六
一部昇格に想う……大町達夫……二七
東大サッカー今後について……加納研之助……二八
サッカー雑感……新主務　北川蘇……二九
初得点……小林喜一……三〇
頭に浮んでくる事……友定正治……三三
永峰富一……三三
鍋島厚……三四
松岡誠也……三四
八林秀一……三五

今年の抱負……四十三年度主将　坂内俊和……三六
―二部で優勝するために―
パニック……武田厚……三七
サッカー……小柳望……三八
私の履歴書……吉崎英雄……三九
サッカーと僕……渡辺彰……四〇
山田知良……四一
佐藤吉見……四二
サッカーに関する書かぬにした事について……栫井成夫……四二
たれも知らない僕の気持……田代康之……四三
小原正……四三
〃闘魂〃寄稿……加藤寛……四四
反省……鹿島文行……四五
サッカー・チーム・個人……副場主将　古村一郎……四五
初夢……清木俊行……四六
プロテスタンティズムの倫理とサッカーの精神……高見進……四七
籠信義……四八

サッカー部この一年……小西敏夫……五〇
OB短信……五七
部員名簿……六一
決算報告……六二

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊ 巻頭言 ＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

闘魂二号発刊に当って

小西敏夫

闘魂創刊号が発行されてからもう四年になります。創刊号が余りに素晴しいものであったためか、この三年間ずっと編集されていないのです。このままでは創刊号で高田さんが心配されておられるように、創刊号即廃刊号となってしまうおそれさえありそうです。そこで今後『闘魂』が続刊される為のレールをしく意味で、今年、第二号を編集することに致しました。準備不足かあるいは熱意不足か、同じ題をつけるのが恥しい程創刊号に比して質量とも劣るものとはなってしまいました。内容もこし一年の活動についての記録と部員及び幾人かの先輩の方々の「サッカーに関することなら何でも」という寄稿だけです。今年は不本意ながらこのレベルで終ってしまいましたが、来年以降、これを最低必要事項と考え、それにその年独特の企画で編集してゆかれることが望ましいと思います。「サッカー部の歴史」もまだ完結しておりません。取り上げるべきトピックも少なくないはずです。来年以降、そうした内容の闘魂が続々と発行されることを期待しています。そんなわけでこの第二号はいかにも急造でほめられるべきものではありませんが、とにかく、ぼくたちが、そのような意図のもとにこの部誌を刊行したということを認識してほしいと思います。そしてそのことに意義を認めて頂ければ幸いです。

（この部誌にOBの寄付の状況を明示する予定でしたが遅れたため、これは後ほど別の機会にゆずりたいと思っています。あしからず御了承のほどを。）

部長　渡辺武男

東大での長い研究生活の最末期の二年間、蹴球部の諸君と共に過すことができたことはまことに、私にとって思いがけないことでありましたが、うれしいことでありました。合宿やグランドに出て、共に蹴ることができたらと考え乍らも、それを果せなかったのは誠に残念でありました。

御殿下のグランドで、諸君が夕闇せまる頃練習にいそしんでいるときに、私も気持だけで共に練習するのがせいぜいでありましたけれども、そんなとき、何故か自分の体内にひそんでいたサッカーの血が、急に湧きめぐるように感じ、会議疲れも逸散し、さらに研究室での仕事に熱が入ったことも幾度かありました。

東大の学生生活で、激しい練習を続ける部員活動と勉学との調和、駒場と本郷とのキャンパスの分離、受験後の体造りのむつかしさ、幾多の困難さの中で、リーグを勝ち抜くことのむつかしさについて、諸君もいろいろ体験され、考え悩んでこられたことと思います。

大学の運動部の存在意義はなんであろうか？　単なる同好者の集まりでよいか？　身心鍛練のためのみの集まりか？　このような問題については、各運動部でそれぞれ論議されていることでしょう。サッカー部ではどう考えているのか？　納会のときに、先輩からも話がでたように、リーグを勝ち抜くことのむつかしさがどのようなものであるか、しみじみ感じられたと思います。私もまた、サッカー部が、関東学生リーグに参加し、輝かしい活動の歴史を残しているからには、一部での優勝は、やはり部としての最終最大の目標だと考えます。この目標にどのようにして到達することができるか？　東大での部活動のむつかしさの中で、どのように早く目標に近づくことができるか？　このようなことを、部員はとことんまで考え抜いておくことが大切ではないでしょうか。大学に部があって共に蹴るという意味は、

漫然と楽しく過ごすことだけでは物足りないように思います。

激しく、厳しく動いて行く社会の中で、貴重な学生生活をする間に、部に入って共に悔いなく過すことの意味を皆で、よくよくよく考え抜いていただきたい。

私は、長い研究生活で、学生時代に少しでも、共に蹴っていたということが、有意義であったと、この年になって一層深く感じている次第です。そして、諸兄と共に語る機会があったことを心から感謝します。来年度はかつて一度は、私の若い頃、共にグランドで蹴りあった、高山先生に部長のバトンをお渡しすることができました。諸兄、新しい監督コーチの先生方を得られた以上は、一層高い目標に向って頑張って下さい。

ＯＢ寄稿

サッカーの栄光のために

新田純典
（大正十一年卒）

昭和四十三年一月十七日、西ドイツのアマチュア・サッカー・ナショナル・チームが、全日本代表と存分に戦って、1：0で勝ち、彼等のアジア遠征を、1引分、5勝と飾って帰国していったことは御承知の通り。

私も国立競技場の中央スタンドで両チームの熱戦ぶりをゆっくり見せてもらったが、当りも強い。カットに飛び込むスタートも早い、ボールを場外に出すまいとする執念も激しい、ダイビングヘッドではね返るボールの勢はすさまじい等々。西ドイツの選手たちのプレーには気魄がこもっていた。正に、「西ドイツの栄光のために」サッカーと取組んでいると受取った。

日本の選手諸君はまだまだ、鍛えられなければならないナーとも痛感した。

だが、私の印象に残ったところを、もう少し追加するならば、彼等には「西ドイツの栄光のために」はあっても「サッカーの栄光のために」という気持は薄かったように思われた。韓国から来て呉れたレフエリーに文句をつけた点などで、私は、そのように感じたのである。

去年イギリスから来たアマチュア・チーム、ミドルセックス・ワンダラーズや一昨年のプロ・チーム、スコットランドのスターリング・アルビオンなどのプレーのなかには、十分、「サッカーの栄光のために」という気概、気ぐらいがあったと記憶する。

一八六三年にロンドンに『ザ・フットボール・アソシエーション』を創設し、その時から「いつでも、どこでも、だれとでも」プレーすることのできるフットボールが確立したのであったが、協会設立までの約四分の一世紀という間に、イートン、ハローを始めとする数多くのパブリック・スクール及び剣牛両大学でプレーの精神、スポーツマンスピリットが築き上げられたのであった。

協会が出来、国内に広くこの協会式フットボール・即ち後にいうサッカー、を拡めた人達はいずれも、パブリックスクールやユニバシテイのＯＢ達であった。ＦＡカップ・トーナメントが行われるようになると国内にグングンと拡大してゆき、まず北の方からプレヤーに対する金銭の支給ということがはじまり、一八八五年に、ついにプロフエショナル・プレヤーを適法のも

のとして管理することに依って、アマチュアリズムの防壁としなければならないようになった。

ペナルティ・キックはプロのするプレーに対する罪則で、アマチュアに対しては不必要であると反対したのはパブリック・スクールやユニバシティのOBたちであった。皆オールドブルーであった。

イートン、ケンブリッジを代表するプレーヤーはライトブルーのシャツを着、ハロー、オックスフォードの選手たちはダークブルーを用いたのである。これら、かつてブルーをつけた人達が、プロを承認しなければならない地域協会に加盟するのはいやだ、『ザ・フットボール・アソシエーション』とも袂をわかつといってFAから七年間も別行動をとったことさえある。真のアマチュア、「ブルー・アマチュア」を命にかけて守り抜こうとしたのである。

イギリスは、アマチュアリズムを守るために敢てオリンピック大会に参加しなかったこともある。FIFAに協力しなかった時代もある。一九六六年ロンドンで行われた第八回ジュール・リメ杯世界選手権大会の決勝試合の映画をみて、イングランドの選手より西ドイツの選手の方が紳士的だったと思った人もあるかも知れない。しかし、多くのイギリス人たちは「イギリスが全世界に輸出したものは数々あるが、一番寿命がながく、否、年を加えるにしたがっていよいよその輝きを増してゆくもの、それはサッカーである。サッカーはイギリスがつくり出した世界の宝物である」と誇りにしているのだ。

for the good of the game ――――――――サッカーの名声を傷つけるようなプレーはすまいと――一人一人が心に誓っているようにさえ思われる。

既に六十年以上にもわたる古い歴史をもち、アマチュアだけが参加できるアーサー・ダン・カップの試合では、いまだかつて、非紳士的なプレーなどといって退場させられた例は一件もないと誇っている。年々ウエムブレーで行われている、ケンブリッジ対オックスフォードの試合でも、それは技術の面では、とても、プロの試合には比較にはならないけれど、はげしい気魂が呼びもので数万の観衆が集まるが、レフエリーも「彼等は真のアマチュアであるから」といって、相当にはげしいタックルや、チャージングに対しても笛は吹かないということである。彼等は、お互サッカーを愛好する者同志がとり決めた約束である。いきおい余ってつい間違うということはあっても、故意に約束を破って迄、味方を有利にしよう等ということは毛頭考えないのである。

何事も、十分な下地の出来ていない間に、うわべだけ、急激に発展すると、とかく、間違いが起りやすい。

日本リーグや、大学リーグのプレヤー諸君の行動は、多数の若い新しいプレヤーたちの手本である。十分に慎重にやって頂

きたい。

ブルーを着る諸君。ブルーを着た諸君。「サッカーの栄光のために、日本のサッカーの栄光のために」技術の面でも、精神の面でも、いやが上にも精進を祈ってやみません。

（四三・二・一、しるす）

スポーツとは自分にとつて何であるか

中村陽吉
（昭和二年卒）

『闘魂』に何か書いてもいいという御知らせがあつたので、この一文を差し出します。

最近円谷という人が自殺しました。それは自殺した人間が又一人あつたというだけのことですが、その理由がどうもオリンピックのマラソンで優勝の自信がなくなつたからであるということになると、現代日本人の持つスポーツ観のくるいを端的に示されたように思いました。

電車の中でスポーツ新聞を読んでいる人が多いので、その見出しが目に入るのですが、ホームラン一本が天下の大事件のように書き立てられたりしていて、そこでは価値観というものが全くくるつているように感じられます。

同じような印象を東京オリンピックの時の新聞やテレビからも受けました。

百メートルで金メダルとかいわれて英雄扱いをされた人と、名前さえ出して貰えなかつた人との差でも一秒の何分の一ではなかつたでしょうか。ビリの人でも私に較べると大分速かつたと思います。そのような差がその人間の価値にどのような差をもたらすのでしょうか。速く走れるということが人間にとつて何だというのでしょうか。私が大阪から東京へ何か届けたいと思つたらアベベに頼むより郵便で送つた方が早い。誰かに飛行機で持つて行つて貰えばもつと早いでしょう。

何人かで競走をすれば誰かが一等になつて誰かがビリになることは始めから分つています。二つのチームが試合をすると一つが勝てば一つが負けることも当り前の話です。私はそう騒ぐこともないように思うのです。勿論スポーツはその性質上勝つために練習もし、勝つために全力を尽すもので、勝つ方がいいに極つていますが、それはあく迄スポーツの中のことです。勝つた者にそう大騒ぎをし、負けた者には一顧も与えない。ついには勝つ見込のなくなつた人間が自殺するに至つては、スポーツは人間にとつて何であるかということを考えて見たことがないんじゃないかと疑がわざるを得ません。

勿論プロは別です。あれは見物人の前で芸を見せてお金を貰つて暮らしを立てている人達です。勝たなければ飯の喰いあげになるのです。芸で生活しようと、頭脳で生活しようと、その人の自由ですから、私は別にプロを軽蔑するわけではありませんが、あれはわれわれのスポーツとは別の次元のものです。現代のスポーツ観のくるいは一つには野球その他プロ興業が盛んになつた結果われわれのスポーツとプロの芸当が混同されるようになつたのだと思います。

もう一つ現代のスポーツ観のくるいに貢献したものはオリンピックだと思います。○○君が一等になると日本が勝つたといつて国旗をかかげたりする。日本人のやつているチームが負けると日本が負けたといいます。これは迷惑千万な話で、私は直接にも間接にも○○君やそのチームに私を代表してくれと頼んだ覚えはありませんから、私にはどう考えても○○君が一等になつた、あのチームが負けたという以上の評価は出て来ません。素々たかが「かけつこ」や「球のゴールに入れつこ」ですから、国家、国民の栄光でも恥でもありません。

ところが政治屋は専任大臣を作つて、そういう催しに巨額の税金を使つたり、出場者に強化合宿をさせたりしましたが、若しそんな金を使うなら街の子供達、酒屋の小僧さん、床屋のおじさん達でも、冬はフット・ボールを蹴つたり、夏は自由に泳いだり出来る施設や機会を作つてくれたら、どんなにスポーツの隆盛に役立つだろうかと思わずにはいられません。

私はこんなやり方をするなら、人々のスポーツに対する考えをくるわすばかりだからオリンピックは止めた方がいい、尠なくとも日本は脱退すべきだと思います。そのうえ今の世界は少しでも国家間の対立感情を減らすことに全ての努力を捧げるべきだと私は考えています。

私は思うままに勝手なことを書きましたが肝心なところが抜けていると思われるかも知れません。それは、スポーツとは自分にとつて何であるかという題を掲げながら、その何であるかに直接触れていないからです。然しスポーツとは自分にとつて何であるかと問うことは、言い直すと自分はどういう人間でありたいかということになるでしょう。そしてそれなら、われわれ一人一人が自由に自分で考えて、自分で極めるものですから、私が述べればお説教になつてしまいます。

東大のサッカーが勝つてくれれば勿論私もうれしいとは思いますが、それより諸兄がスポーツとは自分にとつて何であるかを確かり考えて下されば勝つてくれなくても、もつとうれしいと思います。それでこそ東大だという気がするからです。

（一九六八・一・二六）　　おわり

これだけはやつてくれ

大内　弘
（昭和十二年卒）

一部へ上がるまでお手伝いしようと決心してからも、もう何年たつただろうか、よる年なみで息がきれてきたが、然しまだ全くあきらめた訳ではないので、四月新人を迎えた時と、夏合宿と、納会の試合には顔を出している。四年生を自宅へ呼ぶことも我が家の年中行事の一つになつてしまつたが、然しまだ依然として我が東大サッカーは二部の中位に安定してしまつている。前にも書いたことかもしれないが、四月はがつかりする。体格が悪くて走れないし、蹴れないからだ。然しよく練習するし、いわばゼロから出発するのだから急角度に上昇する。夏合宿の時はオヤツと思う位に上達している。確かに練習方法は合理化され、練習時間は長く、個人個人を見ればやる気も十分あり、個人プレイも私達の時よりもうまい。それがリーグ戦が始まると実を結ばない。然し試合の内容をよく見ると、一回か二回は相当の力を見せて勝つ。そうして二回か三回は実にふがいない試合で負ける。結局又中位に止まることになる。何故充実した試合ぶりで終始一貫出来ないのか。

二部の各チームの実力は殆んど伯仲している。東大の体格も昨年などはかなりよくなつていて見劣りしない。練習量も十分で、個人プレイもある程度には達している。もう少し良い成績をとつても不思議ではない。然し何故優勝できないのか。

それは頭を働かせないからだ。私達の時代の他校と比較してのハンデイキャツプは今よりももつと大きかつたと思う。然し試合の運びと判断で何とか持ちこたえてきた。それが見られないのが一番残念だ。特に昨年の後半はチームがバラバラになり、一人一人のプレイになつてしまつたようだ。「俺がやらなければ誰がやる」という意気込みは壮とすべきだが、それが結局チームの力をそぐ結果になるのだったら、全学連と同じことだ。折角あれだけ練習し、合宿もしているのに、自分の隣りのプレヤーがどうしているのか、何を考えているのかもわからない試合ぶりを見ていると、何か悲しい感じさえ感じる。ずるいと思われる位の二人の間の関連プレイや、前半の拙戦を後半にガラツとかえてしまう戦い方というような、頭脳的プレイが何故見られないのだろうか。勿論それには個人技が土台であり、根本であるが、然し練習を見ているとあの程度でも十分できる連係プレイというものがあるはずだし、出来るはずだ。ボヤボヤしていてとられるオフサイド、ゴールキツクが何処にとぶかを察知して位置をとるとか、相手のスローインの時にノーマークのものはいない、味方のスローインの場合は受け手と呼吸がぴつ

たりあつた球が入るとか、頭を使えばまだまだ有利な試合運びが出来るはずだ。あきらめた試合位見ていていやなものはないが、これは東大にはない。頭の悪い試合、即ち判断（予知）のないプレーだけは、やつてもらいたくないものだ。

再び苦言を
ー監督を去るに当りー

監督　須賀敏孝
（昭和十九年卒）

闘魂も創刊号が出てより四年、部誌として三年に一度位のわりで続刊して戴ければ先輩後輩の縦の連絡機関として大変意義あるものと思います。

さて私は、その後監督を新進気鋭の高田君と交替、一安堵して居りましたが、高田君社用多忙の為又この一年間現役諸君を見て来ました。

然し、矢張り体力の限界と昨今のサッカー戦術の進歩など考え併せ、今後現役諸君とは大旨精神面のみにて接触して行きたいと思つて居りました所、幸にこの度浅見君と言う願つてもない良き指導者が得られ、監督を引受けて下さることになり、ここに私も、心置きなく退く事の出来るのを嬉しく思つて居ります。

監督を去るに当つてこの紙上を借り現役諸君に一言申上げます。諸君が先刻承知の一事を繰返して申上げたいと思います。

それは総ての面に於て既知の事、平凡な事を営々と守り抜こうとする努力を忘らず自己の全力を尽して生活して欲しいという事です。非凡な事をなした人々には勿論尊敬を覚えますが、それにも増して平凡な事を平凡にやり抜こうとする事は大変困難で努力と勇気のいるものです。サッカーに当嵌めてみましょう。それは決してむつかしい（身に余る）技術を追いかける事に汲々とする事でないことは自明でしょう。

確か創刊号にも挙げておいたと思いますが、現役諸君は学問の為に又は自己の最大の能力の限界を試す為に東大を選び見事難関を突破して入学せられた方々であると信じています。その上入学してからは勉学一方でなく、大学生活の中で何かを得て社会に出たいと思い、或る人は文化的活動に、或る人は社会活動に、或る人は運動にその目的を達成せんと、それぞれの部生活をしているものと思います。その中に在つて諸君自身顧りみて如何でしょうか。

この四年間、三年間……諸君は何かつかみ得たものがありましょうか。或いは何の為にサッカーをして来ましたか、もう一度自問してみて下さい。自分の出来得る全力を尽して満足してい

る人が何人いるでしょうか。

自分はサッカーが好きだからボールを蹴っている、敢えて意義は見出さないという人もいるでしょう。

又自分は高校でやって来たから、又は先輩に勧誘されたから惰性でやっているのだと言う人もあるでしょう。又更にサッカー部に入っていれば就職の時に何かと有利だからと思っている人もあるかもしれません。人各々異る事と思います。それはそれで否定は致しません。

然し尠くとも伝統ある東大サッカー部の部生活と言うものはかかる甘い考えのみの同好会的社交クラブではなかった筈です。私が屢敢えて苦言を呈しているのはここなのです。入部の上は各自最大の努力を惜しまないで部生活をして欲しいのです。安易に、単に技術習得のみにて運動をしたと言うのでなく、平凡な基礎の練習を積重ね積重ね、守り通す事に依って生れる重厚さと自信は、それが各自個々の強さを増し、その個々が一つに集中されて始めて東大サッカー部のチームの強さへ繋がるのです。私がかつて監督就任の弁もこれであり在任数年間もこの言葉に終始して来ました。年々この意志の薄れゆく傾向を目の当りにするにつけ、尚又強調せずにはいられない思いがしているのです。かかる努力は単に部の為ばかりではなく必ずややがて社会人となられる諸君の将来に益するものと信じます。これがつかみ得たαとなるわけです。

諸君、お互いに東大サッカー部を強くして行こうではありませんか。

終りに御殿下チームのPRを少々。

御殿下チームは本年より関東リーグに昇格し試合を進める事になりました。

御殿下チームとは如何なるチームか御存じない先輩、後輩の諸兄に簡単に説明申上げます。

昭和三十八年度卒業生（梅村、中村、高橋、内藤、門馬、山根、仁科君）が主体となり、当時のキャプテン梅村君より（当年度は小生監督第二回目の優勝）卒業してから、〃矢張り皆んなとボールを蹴りたいから須賀さんチームを作りクラブリーグにでも入ってやってみませんか〃という相談を受け、それではと言う事で竹腰先輩等も煩わして、メンバーを集め、リーグに出場しました所、初年度より一部で優勝、以後優勝を重ねて居りました所、昭和四十二年度に新に東京リーグ誕生、クラブリーグより推薦されて東京リーグ入り、早速八試合の結果、見事優勝し、続いて関東選手権に出場、作戦的に準優勝を成し、関東リーグ七位、東京トヨペットと二試合行い五ー二、二ー二でこれも見事撃破して本年より晴れて関東リーグ昇格となりました。

このチームは御殿下で試合をした経験を有する先輩、後輩その他で、他の実業団チームに所属していない人格円満なる人々

を以つて編成されています。今年は大いにハッスルして関東リーグより日本リーグ昇格の夢を胸に練習に励んでいます。

後輩諸君、我々でも、努力次第では或る水準まで昇る事が出来ると言う好サンプルとして此のチームに負けずに頑張つてみて下さい。

東大サッカー部諸君のいよいよの御健闘を祈る。

――昭四三・二――

岡野俊一郎

（昭和三十一年卒）

私の現役時代の話である。当時、一対一の練習はフオワードがバックを抜きシュートするだけのものであつた。関東大学一部にいたものの、試合では押されることの多いチームのセンター・フオワードとして、キープ力を身につけることが私にとつて必要な技術であつた。そこで私は一対一の際、一度抜いてもシュートせず、追つて来たバックとボールの間に身体を入れ、キープの練習をしてから更に抜いてシュートすることを実行した。この私のやり方はバックの選手の反感をかつた。一度抜かれれば、〃ア、抜かれた！〃で済むものを、わざわざシュートせずに追いつくのを待ち、キープをしてからもう一度抜くことは、如何にもバックを〃ちやぶる〃と言う感じを持たれるのは当然であろう。私の考えている目的を説明もせず、この方法を続けた自分を今ふり返つてみると、若気の至りとは言え恥しい次第である。しかし、おかげで私のキープ力は増し、それが試合でチームのために役立つたことも事実であつた。

自分の技術を練習で伸すこと、そしてそれを試合で発揮することは重要なことである。と同時に、サッカーがチーム・ゲームである以上、チームの和と言うことはより重要なことである。

問題はこのチームの和の生れ方である。前述のような私のやり方はチームの和と言う点では決してプラスにならないだろう。しかしどんなに仲良くやつても、お互に持てる技術をフルに発揮して激しい練習をしなくては技術的な進歩は望めない。

私が卒業して既に十年余の歳月が過ぎた。日本協会のコーチをしている関係で若い選手と接触することも多いが、そのために東大の選手諸兄とは疎遠となつてしまつた。

ここに書いた〃和の生れ方〃の問題にしても、私の個人的な意見で結ぶよりも選手諸君が自らの体験を通して一つの結論を出した方が良いだろう。

監督を引き受けるの弁

新監督　浅見俊雄
（昭和三十一年卒）

とうとう監督を引き受けることになつてしまつた。こう書くといやいや無理やりに押しつけられてしまつた様に聞えるが、それとはちよつとニュアンスが違う。その辺のことにふれながら監督就任の弁をのべることにする。

日本でいう監督とは職能からいえばヘッド・コーチに相当するものである。コーチがその職分を全うするためには、選手と共に常にグラウンドにあつて、練習のすべてを、選手の一人一人を掌握していなければならない。時には選手個人の生活の中にまで立ち入る要がある。日本の特に大学チームによく見られるような、週に一度ぐらい背広姿でグラウンドの横に立つているようなあり方とは、根本的に概念の違うものである。

ところで現在の東大では、そういう形の監督は望みうべくもない。私自身にしたところで、毎日グラウンドに出られれば必ず東大を一部に復帰させることが出来るという自信はもつているが、そのためには現在の生活のほとんど全てを放てきしなければならない。監督になつても結局は背広姿でたたずむ人達と本質的にはほとんど変らないことしか出来そうにもない。ふうした監督、コーチのあり方を否定する私自身がそうした立場に立たされることを渋つたのである。

それがとうとう引き受けたのは何故か。その最大の理由は東大の選手諸君の資質を信じたからである。資質といつても肉体的な面ではない。私は全日本選手になるのは別として、東大の部員としては肉体的な資質はそれほど高いレベルでなくて充分であると考えている。高いにこしたことはないが、一般人なみのからだならそれでやつていける。私の買つている資質は精神的な面である。大脳生理学的にいえば前頭葉の機能である。意欲し、判断し、意志を持つて行動しようとする働きである。人間が他の動物と違いえたのは、極言すればこの前頭葉の働きといつてもよい。これゆえに自から努力し向上することが出来たのである。

東大生の前頭葉が人並以上であるとすれば、その気にさえなれば肉体的には多少劣つていてもかなりのことがやれるはずである。監督はそのやる気を引き出す役目と私は考えたのである。毎日尻をひつぱたいて無理やりやらせる練習よりは、週一日であつても現役諸君のやる気を刺激するやり方の方が、より人間的であり、東大生にとつてはより効果の期待出来る方法であると考えたいのである。

私はサッカーに関しては現役諸君より多くのことを知つてい

る。また商売からスポーツ科学については世界のトップ・レベルの研究の動向は絶えず入手しているし、私自身も新しい面の研究を続けている。こうしたことをもとにして、現役諸君に何をどういう目的で練習すべきかという判断の材料を提供するのが私の重要な役目であると思つている。正しいデータさえ提供すれば、それを分析し判断して正しい結論を下す能力は持つているであろうし、それを行動に移す能力も充分にあろう。あとはその意欲を適当に刺激してやれば監督の任は何とか果たせるのではないかと思うのである。現役諸君の前頭葉を時にはチクリチクリと、時にはグアーンと刺激するのが監督としての私の役目である、こう考えて監督を引き受けた次第である。

現役諸君との接触によつて、私自身の前頭葉も刺激されることを期待している。もし短かい期間で私が監督の座を退くとするならば、それは現役諸君の前頭葉に失望した時か、私自身の前頭葉が若い諸君に追いつけなくなつた時であろう。現役諸君の努力と、先輩諸兄の御協力を切に期待する次第である。

御殿下クラブ

中村紀雄

（昭和三十八年卒）

最近「万事恋心」という言葉を教わつた。何事にでも初恋の如き一途な気持で打込めば進歩向上疑いなし、という意味である。卒業後既に五年、現役時代もつと徹底してサッカーに恋していたら、との後悔が未だに残る。勉強は後からでも出来たのに。

昭和三十八年一月、前年の入替戦に敗れて以来の虚脱状態から漸く回復して又々球を蹴りたくなつた我々の学年の仲間は、テイームを作つてクラブリーグに参加する事にした。楽しく試合する事を主眼にして、先輩の中でも気心の知れた方々をお誘いし、走らせるために下級生をも加えて人数を揃えた。須賀さんをオーナーに祭り上げようとしたら、「俺が出なけりゃ」と仰言つて、レギュラー第一号は口で決まつて了つた。梅村以下自己宣伝の大家が揃つているので、テイームのマークは天狗の羽扇にした。名前も色々と考えたが、結局センスのない連中が「御殿下クラブ」にして了つた。そのため、五シーズンのクラブリーグで六点を挙げた試合は一つもない。

とにかくリーグに入つてみたら連戦連勝で五シーズン中四回優勝し、最初の三シーズンは土付かずであつた。下手なティームを相手にお山の大将を決め込んでいるうちに、皆さん段々と空しくなつて来て、真剣な試合がしたくなる。丁度東京リーグが結成され、クラブリーグでの実績を買われて一部十ティームの中に入つた。今度も負けない様に試合しようというので、我々の頃の連中のうちまだ走れて使えそうなのを選び、勤務先のティームを二の次にして出場して貰つた。その結果九勝二分で優勝し、十一月の関東社会人選手権に出場した。「関東リーグ迄行つたらシンドイから、この辺で負けようよ」などと言つておられた高田、浅見両ロートルにも、「絶対勝ちましようよ」という畔柳君のやる気が乗り移つてしまい、高田さんは二試合に決勝点を取る大活躍の有様。浅見さんの老巧振りと共に、天皇杯三位となつたLBの底力は恐しいものと思わせられた。準決勝では延長の上高田さんの得点で勝ち、関東リーグ下位二ティームとの入替戦出場権を得た。関東リーグ七位の方が八位のティームより実力が下のようなので、二位になつた方が良いなという事になり、決勝戦には当日結婚式を行つたGK高橋の欠場を認め、予定通りの初の一敗を記録した。私は結婚式に列席したためこの試合を見て居らず、敗因について述べる資格がない（このあたりの表現の曖昧さに御不満の方は関係者にお尋ね下さい。）。入替戦では一勝一分（得点合計七対二）で東京トヨペットを破り、昭和四十三年度から関東リーグに入る事となつた。

現在の御殿下クラブのメンバーのうち、河島君迄は我々の学年が一緒に練習した人又はその練習を指導して下さつた方である。この人々は二部で勝ち一部に上るために相当の（と当時は思つていた）努力と苦労を共にした仲間なので、当時の雰囲気を懐しみ、見果てぬ夢を追う気持があるように私には思われる。しかし、ティームの主力が島田君の学年以下に移りつつある今は、創立者の感傷を捨てて本格的クラブティームの形成を目指したいものである。今シーズンは京大の近年の好選手を四名登録したし、日体大出の方も居られるのでティームの脱皮の機会であろう。ただ、関東リーグともなると勝つためにはメンバーを固定化しなければならぬので、試合に出場できぬ人が増すのがマネイジャーをしている私の悩みとなつて来た。この事の解決のためにも、早く組織を確立して少くとも三段階のティームを持ち、技倆に応じていつでもプレイ出来るようにしたいと思つている。須賀監督の御構想では、将来はグラウンドとクラブハウスを持ち、YCACのように家族全部が一日を楽しく過せるクラブを作ろう、との事である。資金一つを考えても今の所全くの夢であるが、これはこれからの夢である。見果てぬ夢からは今年で醒めて、「日本リーグ加盟ティームを頂点に持つ御殿下クラブ」と言う新しい夢を見始めたいものである。

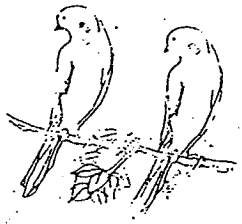
この駄文を読まれる現役諸君よ。皆さんの卒業後の楽しいサッカーは保証しますから、在学中はサッカー狂いになりきつて私のように五年過ぎても未練の残る事がないよう努力して苦しいサッカーをして下さい。サッカーと勉強が両立するというのは大嘘で、サッカーに精力を注げば勉強に悪影響があるのは明らかですから、割り切つて考えぬと精神的に不安定になると思います。繰り返しますが、やる気さえあれば勉強は大学院では勿論会社でも出来ますよ。

スポーツマンの効用と限界について

安達二郎
（昭和三十九年卒）

人はよく「彼はさすがスポーツマンだ。立派だよ」とか「娘はスポーツマンのところに嫁に行きたいと言つておりますの」などと言う。確かにスポーツマンと称する人間はギリシヤの昔よりこの現代に至るまで変らぬ賞讃を受けてきた数少ない存在の一つであり、私は仕事柄、又自分が永年スポーツをやつてきたいわゆるスポーツマンである関係から、このスポーツマンという存在に日頃から少なからぬ興味を持ち、と同時に賞讃に対する抵抗、反発を感じている人間の一人である。さてスポーツマンは何故過去数千年の永きに亘つて世の中にかくもて続けることが出来たのだろう。スポーツマンの特性として、よく明朗快活にして協調性に富み、健全なる肉体に「健全なる精神」を宿し、規則を尊ぶ等々ということがいわれるが、要するにスポーツマンということは絶対に「逆まわり」しない「はずれない」摩耗しにくい高性能の社会の歯車であり、言いかえれば最も安全な順応者であることがこの世に生き永らえた最大の特性であると思われる。それ故スポーツマンは、どちらかというと思想的行動的には保守的傾向を有し、妥協は出来るが事物を止揚させるほどの哲学性はなく、社会生活の能更にはなりうるが改革家、革命家には決してなり得ない人種であると思われる。ここにスポーツマンの効用と限界があり、世の中が平和であればある程、スポーツマンがますます社会からもてはやされ、日夜あきもせず社会の歯車となつて摩耗しつづけるのである。何をかくそう私自身、何かと矛盾を感じながらも自らのたどつた道程は、まさしくスポーツマンのそれ自身であり、これからも決してその道を踏みはずすことがないだろうことを思いただただ悄然とするばかりである。スポーツマンにとつて人世は一種のゲームであり、その激しい闘争も限られたフイールドと一定の規則の枠を出ることはない、そのフイールドは安定した豊

かな社会であり、その規則は犯すべからざる法律と慣習であり、その妥当性を遡及するよりもむしろそれを遵守することを尊ぶのが常である。かつてベートーベンは「更に美しい為ならば破りえぬ芸術的規則はない」といつて悩みをつき抜け、歓喜の第九に到達した。トルストイはその豊かな生れの中にあつてもその目はより深く広いところを見わたし、結局は自らの悩みと矛盾を、過去の絆を自らの意志と行動で断ちきることによつて昇華したと言われている。「悠々たる哉天壌。遼々たる哉古今、五尺の小軀をもつて此の大をはからむとす。万有の真相は唯一言にして悉す。曰く不可解」とうたつて命をたつたのは一高の学生であつた。私はまだ未婚であり、当然のことながら手前のこどもなどというものはただ想像するばかりであるが、もし男の子が生れたら私はこどもに決してサッカーをしむけようとは思わない。有限のグラウンドでその小なるを嘆ずるより、無限の世界でその大なるを嘆ずる方がたとえその生涯は不遇であつたとしても男と生れて本望ではなかろうか。しかしもし女の子が生れたら私はスポーツマンに、否東大サッカー部の出身者に嫁がせたい。何故ならば、娘は間ちがいなく「幸せ」になるだろうし、この凡庸なおやじのよき理解者を持つことになるからである。ふとこんなことを考える今日この頃である。



部員寄稿

主将失格

四十二年度主将　小川　恭　二

勝ちたい。ただ勝ちたい。ただこれだけを思い続けてきたような一年だった。なぜそんなに勝ちたいの？名誉欲？負けて悔しがる敵を見て征服欲を満足させるため？……この多元的宇宙でそんな小さな事柄になぜ拘泥するのか？こんなことをいつも考え、いつも、結局理由はともあれ、勝てば良いという結論を出してきた。こんな思想のない、しかしちょっぴり純真な前主将の短い回顧録を読んで下さい。四十一年十月、畠田前々主将にバトンを渡される。これは大変なことになった。こんなチームで大丈夫かな、という不安はあったが、自分は今まで運がよかったという自信から、リーグ戦はひとつ優勝してやれと思った。七月の京大戦、コーナーキック、押し込みの作戦が図に当り、快勝。しかしOBはあまりほめてくれず、今年の京大は弱いなどとおっしゃる。とに角うれしい。八林、吉崎選手をはじめチームメイツに感謝します。八月合宿。シュートができないようなプレーヤーはGKをやればよいということをどこかで聞いた。この精神で徹底的にシュート練習を行なった。このためアブれるものもでてきて一年の古村などは練習が軽いなどとクレームをつける。しかし自分としては成功の部に入ると思っている。待望のリーグ戦。三戦目までは押されながらもなんとか勝つ。ムードがいい、これはことによると……などと思っていたが、日体大に敗れたのが痛く、淡い希望と化した。敗れたけれども日体大戦はベストの試合であった　敗れたのが夢のような気がする。結局それまでで、その後勝てず五位に終る。悔しい。新主将の藪内君、なんとかこの恨みを晴らしてほしい。任期終了、虚脱感。卒論でもやって気を晴らそう。最後に苦言。東大の選手は皆、気が優しすぎる。もっと激しくなろう。サッカーはスピードと激しさだ。強くなってほしい。これが頼りなかった主将の最後のお願いです。いつも優しかった渡辺先生、須賀監督には特に感謝してお礼を申しあげます。

駒沢　十一月五日

小西　敏夫

「たかがサッカーじゃないか」そう、たかがサッカーさ。「人生は長いヨー!!」（↑ここ青島幸男調）わかってるヨ。クルマにでもぶつからなけりゃ、まだ三、四十年は生きるだろうナ。それでもそれでもやっぱり思う。あんな感激は、もう決して得られないだろうナ！あんな感激――正確に言えば、うまくいってい

れば、いや、ぼくがうまくやっていれば、あの時に得られたであろう感激。

先ほどまで、その上を走り回っていたグラウンド。試合前の練習に励む国士館と順天の選手達。日なたぼっこを兼ねて、グラウンドに目をやる人々。風に吹かれて揺れ動く木々。そしてめずらしいほど青い空……。そういった事物からぼく自身を隔絶する、目に見えない、しかし厚い厚いベール。小説の世界にしかありえないと信じていた「空虚感」などというコトバが、初めてそれらしい実感を伴って、ぼくの胸に浮かんでくる。ほんの十数分前のことだが、まるで遠い過去のことのように。

十一月五日。東大対日体大。三勝無敗どうしの対戦。一―〇日体リード。試合終了まであと五分足らず。ともかく攻めるんだ。一点取ろう。ハーフバックのぼくが、ほとんど攻撃の最先端に出る。やたらとあせる。イライラする。この期に及んでなお落ちついているように見える小柳、忠実にバックラインで、敵の攻撃を懸命にハネ返している小川や吉崎がいらだたしい。「みんな攻めよう！時間がないぞ！」左サイド大塚からのコボレ球。CFの位置にいるぼくは、これを右へ振る。偶然、坂井さんにピッタリ合った。FBの追走をかわしてドリブルしている。「必ずセンタリングが来る」という確信のもとにゴール前へ寄せる。坂井さんが、右の浅い角度から強シュート。キーパー、これをセービングで辛くもはじく。ぼくの目の前に力なく転がってくるボール。ガラあきのゴール、そして倒れたキーパー。これだけが見えた。「はいった！」という力強い確信のもとに、悠々と左足を踏み込む。次の瞬間、何が起こったのか？湧き上がる歓声。（歓声と呼んでいいものか、とにかく、スタンドの大きな声）ぼくの目の前に転倒し、ケガをしたのか動けない日体の選手。そして、どこかへ、日体のゴール以外のどこかへ消え失せてしまったボール！数分ののちにホイッスル。

あの試合に負けても、単に数学的にだけでなく、優勝の可能性はまだあった。逆にぼくらの力からして、あの試合にあるいは引き分けても、優勝は困難だっただろう。けれど、あの時ぼくが、必死でスライディング・タックルしてきた日体の選手と同じ程度の緊張感を持って足を出していたら、スライディングでもシュートしていたら、必ず得られたであろう感激。結果的に、そのあと数分間のうちに再び日体の得点を許し、試合後、暗い敗北感と、倍加されたくやしさの中に沈むことが仮にあったとしても、あのゴールを得たその瞬間に、ぼくが得たであろう感激。あれ以上の感激を、今後味わうことがあるだろうか？限られた時間の中で、あれほど一図に思いつめて、一つのことを目指し、それが成就した場合の極めて直接的な、刹那主義的とも言える感激。それを、ぼく自身の「楽に、ゴールに蹴り込めるだろう」という、ほんのわずかな甘い見通しのために、自分から捨ててしまった。「くやしい」などという、なまやさし

いコトバでは表しようのない感情。今後も、ロビングボールが、風に乗つてゴールとなつたというような、降つて湧いた曖昧に対する感激はありうるだろう。けれど、あのようにひたむきな情熱を、しかも短時間に集約して抱くことがあるだろうか？

「スライディングで、シュートしていれば！」

「日体は農大に負けるさ」「カゼひくから早くあがろう」などという声。更衣室までの長い長い道。おさえ切れない涙。

「負けたから」の涙だけではなかつた。チームスポーツに、このような感情を導入するのは許されないだろうが、それはもつと個人的な涙だつた。「終わつた、終わつた！」何が終つたのか？月並みな、あまりに安つぽい言葉ではあるが、それは「青春」の終りだろうか？ぼくの心の中の分別くささが、一生懸命涙をおさえさせようと、無駄な努力を重ねる。「たかがサッカーじゃないか」「人生は長いよー!!」

青　春

小林将志

「青春」何てすばらしい響きをもつ言葉だろう。五月の空のように一点の汚れもない。そんな青春を夢みて過した四年間だつた。四年間なんて全くアッという間であつた。今、ゆつくりと過去四年間を思い返している。さまざまな思い出が湧いてくる。苦しかつた合宿、グランドでの思い出ＥＴＣ。でもそれらの思い出は六月の梅雨のようにジメジメしたものばかりだ。ジメジメした青春――何て寂しい言葉なのか！　「バカ」に徹しきれなかつた湿気なのか？青春物語にあるような青春を信じていた訳ではないんだけれど。

大学四年間での生活の半分以上を占めたサッカー部生活に悔いはない。もつと上手になれたような気はするが……。自己満足して努力をおこたつた自分がなさけない。しかし自分をあまり「バカ」にすることができなかつた。まあの辺が限界だつたようである。そんなことはどうでもよい。僕らは余りに幼なかつたんではないか。そして幼なさに徹底してもいなかつた。「あれで大学四年生なんて信じられない」なんていう声が聞こえてきそうである。「ヒヨコ」そんな感じ。僕ら四年生がサッカーの技術だけでなく、むしろそれ以上に他の全ての面でもつと強くたくましい「大人」だつたら我がサッカー部も（少なくとも昨シーズンは）もつと変つていただろう。一人でいられないひ弱さが僕らの欠点だつた。そして僕は大人をとびこえてもう老人になつてしまつたみたいだ。ほんとに年をとつたなと思う。何かをする気力もなくなつてしまつた。寂しいと思う。真正面から何かととり組むような生活はもう僕からはなれてしまつたらしい。善き小市民となるだけなのか？四年間はジメジメ

した青春だつたけど、でもやはり僕にはかけがえのないものだつた。

コンプレックス

中井　省

身長が一八〇cmもある。しかし、高校に入学した時は一六〇cmしかなかつた。サッカー部の主将に「これから身長が伸びるからキーパーをやらせてくれ」と頼んだが、彼には信じられなかつたらしく、フォワードにされてしまつた。こんなに急激に背が高くなると、当然、肉のつく暇はない。所謂もやし的東大生の典型であつた。そこで何事をするにも体力が肝腎と考え、大学でもサッカーを続けようと決心した。東大の奴は皆スポーツなどできないにちがいないと思つていたが、少々考えが甘かつた。一年の時、さつそく「オリーブ」という仇名をつけられてしまつた。山村は紅白試合で僕と衝突し前歯を折り「オリーブは固かつた」と宣わつたが、勿論このオリーブはかじれる方のオリーブではない。しかし、こと志と異り、このオリーブは四年たつてもボバイにはならなかつた。無念！

こうして第一の目標は無残に破れ去つた。この目標をめざして毎日精進すれば立派なものだが、残念なことにそれほど意志堅固ではなかつた。当然諸雑念がまざり、その故に副産物も生じた。

自分がまるで体力がない（その上につけ加えるなら鈍足）ということがいつも頭から離れなかつた。一つのプレーに失敗する。そこで練習、しかし急にうまくなれるものではない。絶望、そして帰する所は自分の体力のなさ、その考えが消極的なプレーとなつてあらわれまた失敗する。この悪循環。そうなるとおしまいである。この鎖をどこかで断ち切る必要があつた。四年間がこの悪循環のくりかえしにすぎなかつたのであり、この過程で自分の精神のひよわさを悟るのみであつた。自分のプレーしている写真を見るのは最大の苦痛であつたが、それは勿論そこにいまにも倒れそうに弱々しく、無恰好な自分の姿を見たからである。今それらの写真をながめると姿だけでなく心までもそのひ弱さに二重写しとなり更に苦痛が増すのである。

納　会

主務　中尾　捷

明日は一月二十八日、納会である。これさえすめば僕の仕事はすべて終る。

去年の十一月僕らが東大のチームの最上級生として引継いでから一年三ケ月も経つた。その間マネージャーとして色々やつてきたが、とにかく終つてしまつてホッとすることは確かであ

る。

リーグ戦に勝てなかつたのは残念である。それも完敗した訳でなく、一点差で負けることの多かつたリーグ戦だつただけに尚更である。

去年の十一月二日に四年生だけでミーティングを開いた。そこで僕がマネージャーをひきうけ『キャプテンには練習以外の事で一斉心配をかけまい。』と云う方針らしきものを自分なりに立て、はりきつてスタートした。

あの頃はチームの強さなど分つていなかつたが、秋には優勝、一部昇格が出来るのではないかという望みを十分持つていた。

春合宿を過ぎ、新人戦ではベスト・8に残り、かなりチームに対する自信も付いてきた。国公立で負けたのはショックであつたが、京大戦では、作戦通り快勝したので、夏休みはノンビリ過せた。

夏合宿を過ぎ、朝鮮大、日大、法大と練習試合を重ね、心配していた秋の試験によるムードの低下もうまく乗り切つて、リーグ戦に臨んだ。第三戦まで勝つた。優勝をねらつて良い気分となり、『納会の時、堂々と報告できるな。』と思つたこともあつた。第四戦で日体大に負けた。とにかく悔しかつた。

明日は納会で改めて、先輩一同に負けたことを報告せねばならない。

今年の僕の仕事の中で一番いやな仕事である。

五年にして去るにのぞみ

熊谷貞俊

「お前よく飽きもせず五年もサッカーやつてたな。」上野動物園の変種のサルかなんそを見る目付でこんな事を言う奴が居る。「あほんだら、お前みたいなインポテにサッカーのおもろさが判るかい。」と一発カマシてやると、へーそんな有難いものが世の中にあるんかテナ顔をして黙つてしまいよる。まことにサッカーを知らん奴とは話ができん。それでもこの頃はましになつたもんだ。サッカーに関する知識がサラリーマンの必須教養科目になつている位だから世の中も変つたものだ。僕が雄中でサッカーなるものを始めた頃は、サッカーなぞ言つても判らん奴が多かつたし、たまに関心をしめすものも「ああ、あの楕円型の球もつて走るやつね。」などとぬかしてガックリさせられたもんだが。今じや「大学でどんなスポーツやつてんの」と聞かれて、「サッカーや」と答えると、目を輝やかせて「いまはやりのね！」とはざく女の子が多い。はやりはやりとインフルエンザみたいに言われるとサッカーも有難味が薄れると言うもんだ。「はやりじやない。おれのは慢性だ。慢性胃炎か胃癌かと言われる位のものや、ふざけんじやない。」と言つてやると、大抵憐れみの目つきで人の顔をながめよるね。こんな目

でながめられると僕もハテおれは又なんでこんなに飽きもせんと球蹴つてたのかなとイササカ釈然とせんこともないではない。東京に出て五年、女友達も五本の指に余る所まではいかんかつたし、かといつて勉強一途、中央図書館の全蔵書を読み尽す事もできんかつた。マージャンパチンコ強くはなれんかつたし、人にお前大学で一体何しててんと言われても返す言葉がないのはくやしいね。「イエ、アノーサツカーしてましてん。先輩がね、サツカーだけしてたら間違いないと言いまして、私それ本当にしてましてん。ま、ヨー考えたら、先輩も無責任な事ぬかしましたなあ。へへへ。」と言える位が関の山。畜生、なんでもつとやりたい事テツテイ的にやらんかつたんかなと悔やんでも後の祭。先輩、あんた罪深いよマツタク。

そこで、後輩諸君よ、光輝ある我が蹴球部を五年にして去るにのぞみ、次の一言を呈する。諸君が、諸君の愛する部を強いものにしたければ、諸君一人一人が強くなることだ。ただし、間違つちやいかん。サツカーだけしておつては決して強くはなれんぞ。サツカー選手は酒もタバコもだめなぞと幼稚な寝言をほざいている様では、到底ものにはならん。強くなる為には、様々の経験を積んで、人生の修羅場をくぐり抜ける事が必要である。どんな経験も、すべて勝負事とみなし、勝負に勝つ事にノミ執着するプロ博打うちの如き厳しき精神を身につける事こそ肝要である。故に、大酒くらうも必要、タバコもケツから煙が出る位ノムのも良し。夜の巷をうろつくも結構。女の子を愛すも又よろし。麻雀、パチンコすべて結構。これ等の諸経験に際し常に勝負を念頭におき、戦えば、敵を打倒せずば止まざる闘志をみがけ。ヘラヘラの中途半端な態度こそいましむべきである。真摯にして厳しき態度でなくては何事もあかんぞ。

諸君のツラを見ていると、どうも未だ、乳の臭いの抜けきらんのが多いが、こういうことでは、サツカーはやれんぞ。そんな奴は早いとこ離乳をすませ、稚気を去る事に専念すべきである。それがいやなら、女子大相手のママゴト遊びにでも転向するんですな。私も先輩と仰がれる身になつたが、諸君の色々の体験の手だすけをするが先輩の義務と心得ている故、まあ頼りにしてくれよなあ。

昭和四三年三月一日　記

諏訪勝久

既に四年間の部生活を終えると、苦しかつたことも楽しかつたことも、全てが学生生活の想出の一コマとなる。元来僕は懐古趣味の人間であるから、ひと一倍この気持が強いのかもしれない。四年間の部生活で最も充実した時期は、新入部員として初めて大学のサツカー部に席を置いた頃であつた。当時は出来

るだけ早く皆に追いつくことが当面の僕の課題であつた。満足にキックの出来ない者が僕の他にも、一人か二人いた。練習を終えて三十分から一時間、辺りの暗くなるまで互に球の蹴り合いをするのが僕等の日課だつた。着替えて外に出ると既に真暗らである。十分汗を流した後、鍋焼うどんでも食べて帰れば、その日一日が充実していた気分であつた。だから毎年新入生が練習後二人、三人で暗くなるまでキックの練習に励んでいるのを見ると、全く懐しい姿を見るようで、この後僕等と同じように鍋焼きでも喰いながら先輩の批判をしたり、恋愛談義に花でも咲かせるのだろうと思うと、まるで四年前の僕等を見ているようだつた。しかし、自分は三年四年になるに従い充実感など全く忘れてしまつたかのようであつた。二年までは、勧まし慰め合う友人もいたが彼等も部生活に見切りをつけ次々に去つていつてしまつた。サッカーの面白味をこのまま味わうと言つて残つたものの、最近では義務感のようなものが先に立ち、むしろ何か充たされない気分であつた。恐らく自からの努力が足りなかつたのだろう。四年間毎日の生活の多くの部分をサッカーに捧げてきたのだから、もつと充実した思いで終わつてほしかつた。そして又、そうするのが自分の務めであつたはずである。今思い出しても残念でならない。

アメリカでのサッカー

坂井忠昭

一年たらずの留学でアメリカについて語ることができるわけのものでもないがこの機会に自分の体験の範囲で自分の頭を整理する意味もあつて感じたまゝ述べてみたい。まずサッカーについて語る前にスポーツ全般特に大学でのスポーツについて話さねばならない。我々日本人の性格、気質を反映してか、日本人の「運動」に対する考え方なのか、日本ではどうも運動部以外でのスポーツ活動のしめる比重が非常に低い。我々もこのまゝサラリーマンになつて仕事が忙しく運動部とも関係がうすくなると、運動不足になるのが目に見えているのが現状で、自分の大きな腹をみて嘆息し、久し振りに街殿下へでもいつて球を蹴るかなどと思いたつのである。アメリカではどうもこの運動部なるものがないようである。大学を例にとつてみても、いわゆるシーズン制で、秋にはアメリカンフットボール、サッカー、冬にはバスケットボール、水泳、レスリング、アイスホッケー、春には野球、テニスと季節によつて種目がちがつていることになると運動部なるものができるはずがない。要するに季節の始まりとともにどこからともなく人が集まつてきて「トライアウト」などという試験をやつてチームを作り次の季節が

近づくとファンの女の子をよんでお別れパーティーとあいなるわけ、一年中ヒーヒー言つてサッカーばかりやり、先輩だの後輩だのと言つているのとはわけが違うのである。こういう事情からアメリカの大学でのスポーツは、概して種目が少なく、またそれだけにコーチの数も少なくてすみ、運動部に名実ともにコーチと呼べるコーチのいない我々の学校とは違い、コーチは週五日選手と練習を共にし、コーチのよしあしによつてはゞチームのよしあしが決まると言われる位である。しかし合宿はない。アメリカでの大学で女の子にもてる必須の条件はスポーツをやることであるらしい。秋はフットボールの名QB、冬はバスケットのポイントゲッター、春は野球で四番を打つなどという奴が実際にいて、あれじゃ体がもたないだろうと思えるほどもてている。スポーツ選手は同時に「フラターニティ」という男性共同体の一員である場合が多いから「ソロリティ」という女性共同体とのつきあいも多くこれまた「ソロリティ」にはすばらしい美女が目白おしなのであるからもてるのも道理である。女の話がでた所で興味ある事実は、大学では、女の子のやる種目がほとんどないと言つてよく、体育の時間にホッケー、水泳などをやる程度で、あとはもつぱら応援、アメリカではチアリーダーが女であるのもこの辺の事情を考えて欲求不満を解決しようとするアメリカ的合理主義なのであろうか。女子大などともなると、近くの男子校を応援する手しかないわけで男子校のチームには我等共学のチームよりは熱烈な応援団がついているということになる。これからみるとまた女の子のスポーツがないというのは、その欲求不満のはけ口を他の方に転化しようとするアメリカ人の知恵なのかもしれない。自分もその恩恵に与かつた一人だつたような気もするからである。

さて、いよいよサッカーの話になるが、この僕がスターブレイヤーともてはやされ、春にはミネソタ州のオールスターチームのメンバーになつた事実をあげれば、アメリカのサッカーが技術的にも水準が低く、さらに国民への浸透度に至つてはメイジャスポーツと呼ばれるフットボール、バスケット、野球に比して格段と劣るということが分る。そもそも英語の「フットボール」は、蹴球、サッカーを意味したのに、アメリカでは、何の躊躇もなくアメリカンフットボールを意味するとされることなど、少々腹がたつても、アメリカ滞在中は仕方がないとあきらめるほかはない。僕などもサッカーをやつていて応援の女の子の数が少ないことを何度口惜しく思つたことかしれないが数よりも質だといつも自分に言いきかせて満足していた。昨年アメリカでもプロのリーグができて毎週、日曜日にテレビ中継されるようになり、アメリカのサッカーも一部の人々には人気をえてきているが、アメリカンフットボール等に比べると、今の所正直に言つて、雲泥の差がある事を認めないわけにはいかない。僕が留学した大学のチームも歴史は浅く、三年前にできた

ばかりで試合も対抗形式の親善試合程度であつたが、昨年からはミネソタ州でリーグを形成して総当りで順位を争うということになつたところであつた。どのチームも主力選手は南米、ヨーロッパ、東南アジアの留学生で、アメリカ人は技術的には一段劣る場合が多い。我々のチームも例外ではなく西ドイツ、ジャマイカ、エチオピア、日本からの留学生が攻撃守備の要で僕は総得点十五点のうち九点入れたから、スタープレイヤーの面目はほどこしたということになろう。（関東大学リーグ戦ではたしか一点しか入れられなかつた。）　戦術の面では、ツーフルバック制が主流で、大学のチームでスリーフルバックを採用している所はほとんどなかつた。キック力がないこと、基礎プレーの未熟さから試合はとかくキックアンドラッシュのあひるの球追い的ゲームに終始しがちであつた。ほとんどの者が程度の差こそあれ、アメリカンフットボールの経験者なので、プレーが変な所でラフで荒つぽいのには悩まされた。リーグ戦第三戦目に後から蹴られて肉離れをおこし、二週間位は歩行にも困難を感じたほどで試合どころではなかつた。彼等アメリカ人は、スポーツはラフであるべきだと思つているらしいふしもあるがそれが下手ではあつても一生懸命やるという態度、そしてスピードに表れていて好感がもてた。とにかく彼等と一諸にサツカーを楽しみ、最後、ホームカミングデイの試合に有終の美をかざり、打ち上げのパーティで飲んだビールの味は、最高にうまかつた。また来年の秋までと思う気持と、短かい期間ではあつたが全力をつくして母校の名誉のために戦かつたという感慨とで、お互い握手をして健闘をたたえあつた。缶入りビールをあける鋭い音とともに夜はふけてパーティをおえて寮に帰る頃は冬の始まりを知らせる夜の冷気が息を白くした。ふつと東大サツカー部のことを思い出した。

ユートピアニズムとリアリズム

石田祐幸

A先生はかつて既ね次のようなことをつくづくと私に話してくれたことがあつた。

「我々の思索行動に当つては、常にユートピアとリアリティの対立がつきまとう。それらは常に平衡を保とうとしつつも尚ゆれ動きとどまるところを知らない。

人間の青年期に於いては、ユートピア的側面が強く前面に押し出されてくる。この様なユートピア的段階の特色は希望・願望・目的が中心的地位を占め、現実の状況やその目的、希望等の可能性に対する考察を飛び越えてそれに先行することである。それ故にこのような精神から生み出された計画は現実にかかわりを持つた場合に往々にして挫折することとなる。この様な性格から「ユートピア」という語は批判的意味で使われることが

多い。

こうした背景の下にリアリズムが現われ、リアリティの認容とその因果関係の認識が強調される。このようなリアリズム的段階は客観的ではありながらも、批判的で幾分シニカルな性格をもつている。リアリズムもその深刻さをより深めると、希望目的の持つ意義を不当に過少評価するようになり、ひいては行動の否定をもたらすことにもなる。

我々はユートピアニズム、リアリズムの両極端に立つべきではない。一方では、ユートピアニズムの根の浅さを補完し、それを具体化する方法としてリアリズムが要請される。しかし他方では、リアリズムのもたらす不毛に新たな緑をもたらすための潤いとして、ユートピアニズムも必要不可欠なのである。必要は発明の母、願望は思考の父である。ユートピアニズムは人間の思考の本質的基盤であり、歴史上の発展の出発点である。このことは科学がその出発点に於いては、何らかのユートピアの実現に触発されたものであるということからもうかがわれる。人間の壮年期、歴史の栄興期には、ユートピアニズムとリアリズムの巧みな配合がみられる。健全な発展のためにはリアリズムと同時にユートピアニズムも不可欠である。」と。

以上がA先生が私に話してくれたことであるが、このことと の関連上私はサッカー部生活について次のようなことを考えるとともに反省せざるをえない。

一、東大生の意識――ユートピアニズムかリアリズムか。
二、駒場時代――ユートピアニズム。
　本郷時代――リアリズム。
三、部運営方式――中央集権制か民主制か。
四、二部優勝一部昇格の目的――ユートピアニズムかリアリズムか。本音か建前か。
五、自己（又は部）の内部――充分のユートピアニズムが存在するか否か。なければどこに求めるべきか。

相手のミスにはガメツク！

大塚　隆

勝負というものは、勝たなければおもしろくない。試合内容がいかに充実していたとしても、敗戦はやはりくやしいものである。それには、当然のことながら、得点しなければならない。

サッカーは、前後半九十分あるが、この九十分間を通じて得点のチャンスは、味方にしても相手側にしても、そう多くはないと思う。したがつて、数少い得点機をどれだけ確実に生かすかにかかつていることになる。

今、攻めについて二つ考えてみる。自から組みたてていつて得点に結びつけようとする、いわば正攻法ともいえる攻めと、相手側のミスから生れたチャンスを生かそうとする攻めと、二つ

である。この二つは、時間の経過とともに同質のものとなつていくはずのものだが、ミスが生れた直後の精神状態はミスをした側と、その相手とではかなり異なることから区別したわけである。前者については、いまはふれずにおく。

試合中、両軍にミスが無いということは、まずあり得ないことだと云つてよいと思う。ミスの中でも決定的チャンスにつながる場合がしばしばみられるものだ。しかし、現在のわれわれの水準では、このチャンスを生かせないでいることが多く、実に惜しいことである。

相手側のミスは、ある意味では最大のフェイントとなる場合もあるが、同時にそれは、相手チーム全員にとつては、予想外のでき事であり，守りより攻めの体制へすみやかに転換することで、相手のあせりをさそい、有利に展開することが可能となる。この転換、攻めへの効果的ポジションをとることをわれわれは身につけなければならない。

相手ゴール前での相手側のミス、特にキーパーのミスは、すぐさま得点に結びつく可能性が高いもので、キーパーのこぼれ球などに対しては、ボールに対するしつこさ、得点に対するがめつさを発揮することが大切である。

シュートに対し、逆サイドからのゴール前へのつめを教科書どうり実行することは非常に大切な事である。何度かくりかえせば必ず報いられるものだ。こぼれ球、パンチングボール、バー・ポストからのはね返りボールはもちろん、キーパー・ジュリーターともにラインを割ると思つたボールに追いつき、得点するチャンスも必ずある。これはすべて、実証済みである。たとえどんなシュートであつても、ゴールの枠を通過すれば、得点となる。一点に変りはない。

ゴール前での「しつこさ」「がめつさ」を再認識し、体でボールにぶつかる闘志を持とうではないか。

大町達夫

試合は、何と言つても勝つことだ。考え方を依怙地なものにしないためにも。

昨年のリーグ戦のことである。三勝無敗の後をうけて対日体大戦が行なわれた。勝負は一進一退を続けたが、ひよんなことから勝を失つた。すると途端に部内の雰囲気が一転した。いや、少くとも一転したように見えた。上げ潮に乗つているときは、文字通り万難を排して練習に来ていた者の幾人かは、この期に及んで万難を排さなくなつてしまつた。そして、一見単調そうに見える毎日の練習を、憶せず単調にして意に介さなくなつてしまつた。終には来るべき残り試合に対して、戦意の無いことを口にして憚らない等々であつた。

一体、この一年間何を目標にし、何を考えてやつて来たのか。一部昇格が、皆の暗黙かつ公然の目標であつたことは確かだ。それなのに、三連勝した位で浮き足立ち、沈着を失つたのはどういうことなのだろう。結局、甘かつた、の一言なのだろうか。近年三連勝したことは珍しいなどと、囁き合つていたのが耳の奥で響きわたる。そもそも、あの三勝を思い出してみても、会心の得点というのは数少なく、所謂幸倖というものが大部分であつたと思う。尤も、サッカーというものはそうしたものかも知れないが、ここでは都合上幸倖ということにしておく。勝つているうちはその喜びに覆れて、試合の分析が正しく成されず幸倖が美技としてカムフラージされてきた。逆に負け戦さでは、全てが失策の色に染まり、沈鬱な空気の中で個々の人間が別々のことを考えていた。そのような意味では、昨年度は一見こじんまりまとまつているようで、実際は各々の意志の疎通に欠けていたような気がしないでもない。それで少しピンが緩むと、前記のような具合に大きく崩れ始めたのではなかろうか。

新春を迎えて、三度目の『今年こそは』に思いを馳せている次第である。

ちよっとキザ

加納　研之助

「闘魂」というなまえのついたこの文集には、僕がこれから書こうとするものはふさわしくないにちがいありません。でもやはり、今から「闘魂」をでつち上げるわけにも行かないでしょう。

二年の夏休み前、僕は怪我をして練習を一カ月ほど休んでいました。それまでは、実験のある日の他はほとんど休まずに練習に来ていました。でもそれは、僕がその頃サッカーに打ち込んでいたからではありません。毎日熱心に練習に来ていましたが、僕は気が滅入つていました。サッカーに打ち込めない自分に焦つていたのです。こんなに多くの時間を使つているのに。でも、他のなにかに僕がひきつけられていたのでもないのです。

夏休みに山中へ寮委員で行きました。七月の半ばなのに山中は淋しく肌寒い感じで毎日曇つていました。八月の夏合宿に僕は行きませんでした。大きな期待を持つてやめたわけではなかつたけど、何かもつとたくさんの事が出来るはずだと思つていました。サッカーを続けていた間、ギセイにしていたはずの何かを。ところで僕等はいつたいなにをギセイにしたのでしょうか。その頃二浪していた僕の友達は、春が来て今度は三浪する

ことになりました。僕の方は、ほんの少し勉強をする様になつた他は、何事もおこりませんでした。そうではなく、おこつていたのです。僕はまた部に戻りたいと思う様になりました。そうすれば僕はすべてを得られる。そうではありません。今度こそサッカーに打ちこめる。そうではありません。それは分つていました。ただ授業が終つて僕が乗つたお茶の水行きのバスの窓から薄暗くなつたグランドを走る皆が見えるのです。どうも単純な人間のようです。

一生に一度しかない学生時代に何か打ち込む事が将来良い結果となるだろうから、僕等はサッカーをやるのでしょうか。僕等に将来残るものは、意味のない断片的な思い出と、おそらくは後悔。でも今日はこうしなければならないと思うのです。僕等はきつと何もギセイにしていない。みんな、サッカーをしてもぼんやり暮していても、傷ついて、不安で疲れているのだと思います。ずつと僕らはひとりきりでしょう。それでも自分をわかつてもらいたいのです。だから、その場かぎりの友情と、きつと誤解であるかも知れないお互の理解とが、僕らの求める事が出来るものの全部ではないでしょうか。僕とサッカー部とはそういうわけです。

一部昇格に想う

北川　薫

リーグ戦も終り、今年度も一部昇格はできなかつた。当然のことながら東大蹴球部一部昇格は部員ならびに先輩諸氏の願いである。

ここ数年はサッカーブームとかで世間ではサッカーはもてはやされている。中学校・小学校での授業は勿論の事、学校という枠から離れサッカー技術習得を目的とした少年の組織も生れる様になつた。それとともにサッカーの底辺も広がつていきつつある。こういつた現実をひきおこしながら大学サッカーもその技術を大きく飛躍させてきた。そしてこれからも技術の向上は求められていこう。

こういつた中で我々は、学生としてのスポーツの在り方を充分に考える必要があろう。教育という立場から見れば、スポーツの意義は精神的陶冶に求められるであろう。スポーツを行う事により、その過程にある肉体的苦しみ、精神的苦しみに耐える事が大切である。そして勝利は第二義的性格のものである。一方これに対立する考えとして、スポーツ主義、即ち、勝利第一主義がある。これは文字どうり「勝てばよい」のである。

東大蹴球部員は学生という絶対的な枠の中にある以上、学生

の本分は本人の希望すると否とにかかわらず果さざるをえない。そういう制約の中にあつて進歩する技術を習得せねばならない。かつて大先輩の中には一日六時間もの練習をなさつた方がおられるとか。しかし全員がそうなることは無理である。せいぜい一日三時間程度であろう。時間の面ではそこまでが脱落者もなく、教育の一環として部活動が行なえる限界である。

部の状況をみるに、教育の一環としてのサッカー、という立場は明確にとらえられる。しかし、そこには決定的な落し穴がある。それは、勝利追求に対する執着心の欠如である。教育としてのスポーツでは確かに勝利は第二義的であるが、それは決して敗北主義であつていいはずがない。全力を出しきつて敗れるのは仕方がない、という程度に解釈すべきだ。さらにゲームの終了の一瞬の時迄、最大の努力をしなければならない。そうする事により教育としてのスポーツの意義は充分に達せられよう。この事は勝利第一主義とはならないと思う。何故なら我々は学生としての本分を充分に果す事を前提としているからである。

東大サッカー今後について

新主務　小林喜一

昨シーズンは一時優勝戦線に入りながら、後半しりつぼみで結局二部五位に終つてしまつた。

関東大学サッカーリーグは今改革の時期で、これまでの一部、二部・・・・七部の制度を改めて一部二部をスーパーリーグとし、これをリーグの頂点におき、その他のチームは今までの縦一本のリーグから、県別の並列のリーグとし、その勝者のうちから一、二校がスーパーリーグ下位)、二チームと戦うようにすることになつた。

これは学連内部から出たことではなく協会からの押しつけの感があるが、今のように関東学生サッカー連盟が膨張してしまつた現在サッカー発展のためにはその新陳代謝を計る必要があり、その観点からすれば歓迎すべきことかも知れない。

その他スーパーリーグ内の数も一、二部とも六校ずつにしようという案もあつたが今年度は実施されないらしい。

ここで「らしい」と書いたのは、今学連を動かしているのはサッカー協会であり、学連はその忠実な執行機関でしかない。これにはぼく等それを構成する者が今までしつかりした運営をしなかつたからで、自分達がこれからどう動いたらよいかを上

から言われるまで解らなくなつてしまつているからである。

だから今度のリーグの改革も三部以下に相当不満を持つている大学があつた、年中こんなことをやつていると現在ラグビーの方で問題になつているようなことにもなりかねないので今後は学連自身の考えをしつかりもち協会に働きかけ共によりよき方向へ進みたいと思う。協会には、新田氏、竹腰氏ら東大出身者がいるので理解していただきたいと思う。

さて東大のサツカー部はというと、二部五位、先に言つたような一、二部六チームずつということにでもなつたら現在上から十三位であるから惜しくも落ちたかもしれなかつたわけで誠に情ない。今後も下位二チームの入替え戦となるとおちおちしていられないわけで早く一部に入らねばならない。

そこで今、今年こそは二部優勝のためにがんばりたい、選手全員その意気に燃えていますのでどうぞ御支援、御鞭撻のほどを！

今年（四三年度）の財政状態について

小林喜一

昨年度からの引きつぎで、二六、〇〇〇円受けたがしかしこれも三月末の検見川合宿でボール代の一部と消えてしまい、その上この部誌を作るのに六万かかり、広告代をさし引いても三万が必要で、実際にはこの三万の赤字で四三年度は出発したことになります。

運動会から、昨年と同じ一八万三千、学友会から五千円アップの一〇万一千円、基金からの利子が一八万円、合計四六万四千円、部費を合わせても五二万位が今年の収入です。一方支出は、ボール一〇〇個分三八万円、ユニホーム代四万、京大戦一〇万（本年は京都へ行く）、通信費四万、計五六万円、従って差し引き四万、前年度の赤字分と加えると七万の不足となります。

その上、今年は、例年ほどほどにやっているグランドの整備を根本的にやり直さなければならないような状態になりました。先日農機メーカーに、下取りに出たものを安く売ってもらうように交渉しました。このこちこちの、数十年何ら大手入れをしていないグランドを直すには一〇万はかかりそうです。それでも毎年土を入れるだけで八万もかかっているのに較べ割安にできるようです。又強筋のためのバーベルがぜひ必要だというので一組買いました。これらの費用は先ほど基金に寄附をいただいた湖村氏からの一〇万円を、新田さんに了解得て前借りした次第です。いずれは基金に返さなければなりません。これから京大戦をひかえてこのようなピンチですので先輩からの寄附をお願いしたい次第です。

夏休み以前に部員が押しかけますのでよろしく御願いいたします。

◎住所変更

芦屋市松浜町三五　公団浜芦屋住宅六ー三〇二
電話　〇七九七ー三ー二三二六
沖　朗氏　昭和一二年卒（法）　一高
三菱倉庫神戸支店長

た。とにかく自己の内にサッカーを確立せしめよ。

サッカー雑感

友定正治

中学では野球、高校ではテニスをやつていた。大学へはいつて一年間はボケーとくらす。何とも時間をもて余しこのまま時間をのがすのがアホらしいと、二年の春に部員となる。育つた土地柄、小、中、高とサッカーとのつきあいは長く球扱いには自信があつたが、遊びのサッカーとホンモノのサッカーはいささかちがいあり。何しろ基礎が全くダメ。体力がない。もともと争いを好まぬ性質ゆえ、ボールの奪いあいでもまあいいやなどと、はなはだ無責任。二年生のときはみんなのあとから何となくついていつたが続けるうちに、面白くもなるし意欲らしきものも湧いてくる。サッカーに対する積極性も出てくる。が部生活が長くなると、これ以外の生活が考えられなくなり、練習は毎日のツトメになつて、今度は受身のサッカー暮し。あれやこれやの毎日なれど、今やサッカーは生活の中心。

今年はいよいよ四年生。一部入りを目標に、できるだけのことはやつてみる。少々の練習にはへこたれぬつもりで。人間安楽にくらしたいもの。それをサッカーにすりかえてはならないのだとは思う。「安逸ほど醜いものはない」と先人がのたもう

三年　永峰富一

おれはあの瞬間になにを考えていたのだろうか、いつたいおれのからだは空中に飛んでいたのだろうか、たしかにすばしこいボールの奴はおれの手をかいくぐつてゴールに突き刺さつたのだ、ネットをゆすつた音だけが妙に印象的な、そんな静止した瞬間の記憶が、こうしてシーズンの終つたグランドの日留りの中に立つていると、底のほうから浮かびあがつてくる。鋭く凝縮された、単調な時の流れから欠け落ちたような、その記憶には、おれの筋肉と神経のリアルな緊張感と、おれのからだの下にあるとも、上にあるともわからぬ、生温かい空間の触感とが、からだの一隅にまとわりついて残つている。

あの日のまるで秋の豊さを感じさせぬキラキラと眩しい光線は、試合前のおれ達を陽気にさせ、ロッカールームの笑い声におれ達のひそかな不安を包み隠していつた。おれ達は敗北を恐れてはいなかつた、がスパイクを結び、透明な空を見上げたとき、狂つた血が膨れあがつた血管をかけめぐり、おれのからだを爆発させた。心待ちしていた瞬間が始まる、おれはそこに幸福を感じた。

「そのとき、すべてがゆらゆらした。海は重苦しく、激しい

息吹を搬んで来た。空は端から端まで裂けて、火を吹らすかと思われた。

私の全体がこわばり、ピストルの上で手がひきつつた。引金はしなやかだつた。乾いたそれでいて耳を聾する響音と共に、すべてが始つたのは、このときだつた。」

鍋島　厚

親のスネをかじつて大学へ行き、勉強もロクにせずにサッカーばつかりやつていられるのだから、全く天下泰平な世のなかだ。こういう事は多分いい事なのだろうが、まあこの際こんな事は関係がない。大体サッカーというものは他のスポーツよりも、時間をかける割には上達が遅いように思う。全くいつまでたつてもうまくならない。今更こんなことをぼやいても仕方がないわけで、少しでもよりうまくなるように心がけるしかない。練習の際には、うまくなろうとする意欲が必要なのであつて、どんなにいい練習をしても、練習にどんなに時間をかけても、やる人の意欲がなければ仕方ないのである。ところでサッカーを何故やつているかといえば、サッカーが好きだからに他ならないわけであるが、このサッカーが好きだという気持ちをいかにしてうまくなろうとする意欲と結びつけるかが問題になると思うが、なかなかうまくいかないもんだ。

終り。

初得点

松岡誠也

僕がサッカーを始めたのは、高校に入つてからです。高校の入学式の帰り、同じ中学出身の連中三～四人電車の中で、何か運動のクラブに入ろうという話が出て、誰かがサッカーをやつてみないかと云いだし、結局つぎの日にグランドへ行つてみようということになつた。僕は中学二年までは兵庫県の西宮に住んでいました。その中学はサッカーが盛んで、クラブは近畿地方では強かつたし、クラブに入つてなくても、冬になると昼休みはいつもグランドで、クラスを二組にわけて試合をしたし、正月には全国高校大会を見に行つたこともありました、そんなわけで、もともと好きでしたし、やつてみたい気もあつたので入ることになつたのです。翌日の午後、グランドに行つてみると、一〇人程がゴールをかこんでボールを蹴つて遊んでいました。第一印象にあまりうまくないな、と思つたがともかくゴールの後に立つてみんなで蹴つているのを見ていると、その中の一人で、東大サッカー部の先輩にもなる人が、ニコニコしながら近寄つてきて、サッカー部に入りたいのかときくので、ええと答えると、ほかの人達も集まつてきて、春合宿の時の面白い話

などを聞かせてくれました。それから僕のサッカー部生活が始まつたわけです。

サッカー部に入つて二ケ月余り経つた六月の上旬に、都立小山台高校との練習試合があつた、僕は左ウイングとして出場、今から考えてみると、なぜその時ウイングなんかやつたかよくわからないが、多分ウイングとして大成するはずだつたんだろう。前半、CFがまん中からドリブルでもち込み、そこへCHがタックルをかけ、ボールが左の方へころがるところを、僕が走り込んでゴールめがけて蹴ると、不思議にもボールはまつすぐ飛んで前へ出ようとしたキーパーの頭の上を越えてゴールに入り、ネットが揺れ動いた。あまりにも奇麗に決まつたのであつけない気がしたくらいです。

もうサッカーを始めてから五年近くなる。その割にはあまりうまくなつてない気がする。始めたときはもつとうまくなるつもりでいたのだが、一流の選手になるには七～八年かかるという話であるから望み無きにしもあらずである。但しこれは一流選手になるとしてのことである。何んといつても一番大事なのは日頃の積み重ねであつて、毎日毎日やつてはじめて少しづつ伸びていくものである。これがでるころには四年になる。大学でサッカーをやれるのもあと僅かである。やはりリーグ戦ではいい成績を残したい。

頭に浮んでくる事

八林秀一

高校へ入学して何の気なしにスポーツでもやろうかと思つてぼんやりしていた時に、どういう事からかこれといつた理由もなかつたにも拘らずサッカーのクラブに入つてしまつたのが始まりである。高校生は只で試合が見られたりして現在のサッカーブームなぞは想像もできなかつた頃の事だつたが早くも六年たち後一年で終りになりそうだという所まで来た。山の中腹でああここまで来たかなんて考えるのもおかしな事とは思うが、何が書けと言われるとこうなるのは世間よく有る事ゆえ許して貰いたい。さて、六年の継続と言つても、病気して半年程休んだり、大学受験でかなり休んだり、一番大きな変化として大学の運動部組織の中に入つてやる事になつたり色々あつた。しかし僕の意識の上では全く連続してきたようである。僕は小さい時に一人でピンポン球を使つて家の中でずつと遊んでいる事がよくあつた。サッカーもそれと本質的には同じでないかと思う。何故？と聞かれるとただ好きだからとしか言いようがない。この好きだは何故やつてきたのかという愚問に対して徹底的に突詰めて得られた愚答であつてたいして積極的意味は無いのである。大体生活というものは疎密波のように、自己満足自己嫌悪

がある時はより濃くある時は薄くなりしてという具合に経過していくものであり、我を忘れて打込むという三昧の境地は、涅槃のように永遠の輪廻からの解脱によつてのみ得られるのではないかという気がする。ともあれ、歩いている時、電車を待つ時などに僕がヒーローたるべき試合を思い浮べて一人で楽しむ事がよくあるが、これも実現のチャンスは最後という事になつた。最後に、言葉は人の心を隠すためにあるそうだが、隠し方そのものもその人間によるのではないかという事を、ちよつと気になつたので、つけ加えてこの拙文を終りたい。

今年の抱負

―二部で優勝するために―

四三年度主将　藪内俊和

昨年一一月にバトンを引き継いで、一二月・一月と二ケ月間、すでに主将として練習をしてきたわけですが、シーズン・オフの今、新チームとして出発した時に考えたこと、今年の抱負を改めて考えてみたいと思います。歴史あるいはこれは伝統ということばにいいかえてもいいのかもしれませんが、一には、継承と断絶の二側面があるといわれます。例えば、ヨーロッパなしにアメリカはないと言われながらも、主体的にはヨーロッパへの反感を通じて成長したアメリカや、最近の中国の文化大革命にもそういう面があるのかもしれません。

革命という革命はすべて過去との断絶をこととしながらも必ず過去の蓄積の上にその業をなしていることは歴史上明らかなことでしょう。何故こういう話をもちだしたかというと、伝統ある東大サッカー部という時の伝統の意味をもう一度考えてみたいのです。この場合、伝統には二つの意味があると思うのです。一つはむろん、過去明治時代に蹴球というスポーツが日本に初めて入つて以来、昭和二〇年代まで、日本のサッカー界の指導的地位にありつづけたという伝統です。もう一つは、二部におちて以来、已に一〇数年たつという伝統です。僕達が東大サッカー部に入つた時はすでに二部におちて久しいという状況にあつたので、前者について文字通り伝統としてあるいは昔話として、先輩の話や記録によつてわずかに追体験するに止まるのに反して、後者のそれは僕達にとつて身についたプレーの型、あるいは思考の型としてステレオタイプ化しているわけです。だから、一部を経験した諸先輩にとつて僕達は実にまどろつこしく感じられるでしょうし、僕達は、僕達で、客観的情勢（受験問題など）に責任を転嫁しておいて僕達は僕達なりにベストを尽くしているつもりだということになります。一部を経験された諸先輩と僕達との断絶はここに原因があります。僕達にとつて客観的情勢の変化ということは考慮しなければなりません。年々入部してくる部員の技術レベルは、東大の受験の門をくぐつて

くるうちに下らざるをえないということは認めざるをえません。しかし僕達がなすべきことは客観的情勢を分析することではなく、それを思考の外において、あるいは前提として、いかに技術レベルをトレーニングによってあげるかという実践以外にはありません。僕達が先輩との断絶を回復する道は僕達の方から先輩に積極的に働きかけてコミュニケートを求めるということ以外にはありえないでしょう。さらにそれを行った後に、良い成績をおさめることでしょう。僕が主将として新しく部を建てなおすために考えたことは、先輩との交流（生意気なようですが）と、ハードトレーニングです。前者は小川さんにも指摘されたことですが昨年はたせなかったことを今年こそはやってみたいと思っています。後者については、二部低迷から脱けだすための唯一の処方箋として毎年言われてきたことです。練習量丈について言えば一部校あるいは日体大とそれほど差があるとは思いません。ただ例年の練習は考えすぎの練習だという気がしてなりませんでしたが今年は僕の納得のいく練習をしてみたいと思っています。ハードトレーニングの〃質〃の向上を期するのに僕達にとって有利な条件は浅見監督、戸刈コーチ、菊池コーチに指導して頂けることでしょう。具体的な練習方法や技術指導は浅見さんに一任して僕達は、部として打倒日体大に集中できる体制をつくりあげることに専念するつもりです。具体的に言えば個人技術の向上と部の雰囲気を盛りあげることです。例年のリーグ戦を見たりあるいは対戦して、僕が感じるのは、二部の対戦校についてはそれほど決定的な技術の差はないのではないかということです。そして最後には結局、〃激しさ〃で敗けてしまうということが再三あったような気がします。僕は今年の東大のチームカラーを激しさということに求めたいと思っています。オゾーリンの言葉で言えば、〃真の勇気〃です。激しさといっても内容はさまざまなものを含みうるでしょう。しかし、個々の場面でのたくましさと、全体のゲームの中でのゲーム運び――つまり勝つこと――とはその様々に異りうる内容の共通項でしょう。これが達成できたかどうかは来年になってみなければわかりません。ただ、伝統のある意味での継承とある意味での断絶を通じて打倒日体大、二部優勝を達成したいと思っています。

パニック

武田　厚

かぜにかかったやつらの前で、＜かぜをひくなんてバカだな＞と笑っていたら、いつの間にかうつされてしまった。

連中はパニックの状態で、毎日重たいカバンを持って旅している。＜長い徒歩旅行じゃさぞお疲れでしょう……＞といっ

ていたら、今では俺もお仲間入りしている。

別に好きでやつている訳でもないが、毎日存在理由（ラソンデセール）と生存理由（ラソンデビ）とにはさまれて、格闘しながらヨタヨタ歩いている。イヤイヤながらでも今では連中の仲間で、同僚として歩いてるんだから、何もこんなこと、云えた義理じゃないんだが。

それでも、俺だけはまだ澄（ピンチ）青の中にはまつちやいないと信じている。連中とは隔絶した一線があるんだと信じている。それはそれは深い溝で、連中は向う側、俺はこちら側の連中は互いの様子をうかがいつゝ、俺はマイペースで・パニックに襲われても、俺だけは、まだ脈があるんだと信じている。

この信念もどれ程かしらないが、ともかく一応、俺を支えてきてくれた。御本尊はやはりサツカー部。〈まだサツカーを？〉〈まだサツカー部なのか・〉——と他人（ヒト）に笑われても、〈俺がやめようと思つたつて、どうしてもやりたいもう一人の俺がいるんだ。〉——答は俺にだつてわからない・〈何ぜ？〉〈何ぜいつまでも？〉——いくら好きな女（こ）に聞かれても答えるわけにはゆかない。

でもこれだけはいえる。〈俺の生活なんだ。〉

被害妄想にとりつかれている時は、〈麻薬だよ〉などとののしりながら、失恋の憂き目をみると、〈神様……〉。ちよつとほかにやりたいことができると〈時間の無駄だ〉などと邪慳物扱かいしながら、しばらく経つと、〈畜生、恋しくなつた。〉。

結局サツカーをやる。マイペースの基準はこれなのか。連中との一線は、ここにあつて他（ホカ）にはない。正にそうした意味で、俺にとつてこれは守る価値があり、意欲をそそるものなのだ。俺が本当にパニックに襲われるのは、だから、〈卒業の時〉だろう。だがその時には喜んで応対しよう。

一九六八・二

二一回目の誕生日を迎えて

サツカー

小柳　望

高校一年からサツカーを始め、大学二年に到るまで、およそ五年間サツカーを続けてきた。時々、いつたい何が面白くて、そんなに一生懸命になつてやつてきたのか、と考えることがある・高校時代は無我夢中で、学校へ行つて皆と一緒になり、ボールを蹴るのが、唯、楽しかつた。バツクを抜いてシユートし、そのボールがゴールの中に入れば嬉しかつたし、クリアーしたボールがハーフラインを越せば喜んだ。しかし、大学に入ると少し変つた。シユートする時はゴールを見、キーパーの位置を見た。クリアーする時は、ウイングの位置を見、何処へもらいたがつているかを見た・そして、自分が蹴ろうとした場所へ、ボ

ールが思つた通りに飛んで行くのを見ると、心が晴れた。ボールを不器用な足で、思うがままに扱うこと、完全に支配することがサッカーの楽しみではないだろうか。

私の履歴書

吉崎　英雄

私がサッカーを始めたのは中学時代である。それまではロクにルールも知らなかつた私が、本当のサッカーボールを蹴り、その後その魅力にとりつかれたきつかけは、中学校の先生――私は中学時代に音楽関係のクラブに所属しており、専らそれに全力を傾けていたのであるが、そのクラブの顧問の先生がサッカーでもやつてみろ――と云うのは、当時私は非常に消極的であつたから（今でもその気味はあるが）かも知れない――サッカー部への加入を勧めてくれたからである。中学時代には音楽関係のクラブ――実を云うと「ブラスバンド」である。蛇足ながら付け加えると、このバンドは私が入学した時に結成され、現在では全国で一、二位を争う名バンドに成長している――に無我夢中であつたが、それでも休み時間や、放課後の空いた時間を見つけては、或は又朝早く学校に出かけては、ボールを蹴つたものである。

本格的にサッカーに魅了されたのは高校時代であろうか。私は中学校卒業後は高校入学以前から高校でサッカーをやろうと心密かに（？）決心していた。そして高校――小石川高校である――に入学するや否や何のためらいも無くサッカー部に飛び込んだ。高校ではサッカーが、中学時代のブラスバンドにとつて替つたのである。毎日のように――練習は週に五日程であつたが、休みの日も球と戯れていたから――マリ子さんとのランデブーが続いた。

高校での我々のテイームは全く不本意な成績しか残せなかつた。「不本意」と云うのは、実際もつと良い成績を挙げて当然（！）と思える実力を備えていたと、今もつて確心しているからである。最良の成績が全国大会の東京予選の準決勝進出であり、目標であつた関東大会は東京予選でその夢を打ち砕かれてしまつたからである。かつての名門「五中」の「夢よ、もう一度」という野望は、ついに夢で終つてしまつた。

高校時代私は初出場の試合――一年の夏の国体予選であつたが？――からポジションはセンターハーフであつた。その後、三年で引退するまでこの位置を動いたことは無かつた。この位置が決まつた契機と云うより要素の一は――この事はいまだに無明に記憶に残つているのであるが――初めての（一年生で）夏の合宿の時に、コーチ格たる先輩が我々にやりたい位置を尋ねた際に、私は非常にとまどいながらも「バックでいい」との

答えをしてしまつたのである。――「とまどいながら」――と云うのは、私は中学時代に試合をする時には必ずセンターフオワードであつたから。驚く（？）御仁もあろうが、事実だから致し方あるまい（！）――――。それでも私は高校時代は、この与えられたC・Hという位置を無難に黙々と勤め上げたつもりであるー、否むしろ自ら進んで受け入れていたのである。では何故こんなことを持ち出したかと云うと、現在に不満があるからである。私は今やC・Hに愛想が尽きたのである、というより反対に私の方が愛想を尽かされたのかも知れない。大学においても未に最後尾のバックから昇級（！）しないでいるのであるが私は自分のプレイするC・Hが嫌気がさしたのである。これは大学に入つてからの事であるが、この位置から逃れたいと云う願いは、神様が一向にお聞きになつて下さらない。この願いが切々たるものであればある程「あの一言」が思い返され、私の心はやるせない気持で叫ぶ「あの一言が多かつた！。」実際に私の「言葉」がどれ程、要素として効力があつたか知る由もないが――。

私は高校を四年務めて大学に入学したが、大学入学時にはサッカー部に入るか否かで非常に迷つた。心の内では二転三転しながらも、ついに割り切れない気持で入部を差し控えた。私がそれまで送つて来た生活の無思慮、没我性の反省とその償いとして、殊勝にも、アカデミックな生活と自由な時間を享楽すると云うことに憧憬にも似た一種の現実的要求が内在的に私には有つたから。しかし、それはやはり憧憬に過ぎなかつた。私はかつてなかつた程の自由の時間を現実に享楽し得るようになつたにも拘らず、私の目の前に朦朧としたもの、混屯としたもの、巨大なるものが現われ、我々人間の能力の幾バクかを問いかけて来るのである。そして亜憧憬的生活から疎外感を否応なしに受けた私は、従来のいわゆる「私の現実的生活」に戻ることを余儀なくされた。私の生来の楽天的な性格故であろうか。かくて私は入部した。入学後三か月の事であつた。そして現在に至つている。もはやサッカーは私に対して、恋人たるの地位を築いてしまつた。「我々二人」の間柄が、「何故に？」と問われようとも、愚弄ーチョウ笑されようとも、はたまた正当視されなくとも、どんな巨大な外力が加えられようとも、私は「彼女」を離さないー、「彼女」も私を離さないであろう。

サッカーと僕

渡辺　彰

大学に入ってすぐにサッカー部にとび込んで早二年も終了。だが一向に実を結ばず、悲しき限り。どうも練習好きでないせいか、練習中も時々デレデレしたり、或いは最初から練習に出なかつり（世間ではこ

れを〝サボる〟と言うようだ）の上に、プレーもうまからず、うまからずとあつてはまあ当然の結果といえばそうだろう。けれど僕はゲームでは最低限のことが出来るという自信だけは常に持つている、とは言つても自信だけじやあまり採用してくれる傾向はないようだが。

話変わるが我々の学年も段々と人数が減つてきてしまつた。新人戦当時はピタリ十一人一チーム分いたのが今では七人位となつてしまつたのはお互い寂しい限り。ひよつとすると小川（恭）さん達の代より少なくなつてしまうかもしれない危険もある。そうなつたら大ピンチ。しかしまあこの際は先のことを考えずに少し練習をガツチリやることにでもするか。でもやはり……。週五日フル回転てのはどうもいい話ではないし。藪内さんはかなり厳しくやるつもりのようであるが、小生としては可能な限りにおいて、去年のようなムードでやつていきたいものである。

末尾になつてしまつたが、卒業する（しない人もいるかもしれないが）四年生に四年間どうも御苦労さんでしたと言いたい。去年の四年生にはかなり適当にお世話になつたし、そのせいばかりではないが不思議に接しやすいムードをもつていた。お陰で去年一年は案外楽しかつた。どうも御苦労さん、そしてアリガトさん！

山田知良

二年間。そうですちようど二年間たちました。過ぎてしまえば短かいものさと人は言うかもしれませんが、やはりそれはそれだけの、二年間という重みをどつしり感じさせます。

でも思い出そうとすると、あんまり大したことは浮んできません。二年も前なんていうのは、けつこう古い事に属するのでしようか。それとも記憶力が悪いのか、いま風邪をひいていて考えるのが億劫なのか。

ともかく曲がりなりにも、部に入つて二年間たちました。入つた時には何十人もいたのに、今では僕たちの学年は九人になつてしまいました。これはどの学年も皆同じようです。その九人の中の一人として僕はまだ部に在籍しているわけですが、サツカーが死ぬほど好きなんて理由でいるわけではありません。無論、嫌いなのにいるという、わけのわからないことでもありません。結局、つらつら慮ると、僕は、この部の雰囲気が好きなようです。雰囲気がいいというのは、言い換えれば、皆な和気藹々としているということだと思います。

合宿なんかで寝起きを共にし、サツカーを離れても一じよにスキーなどに行つたりすれば親しくなるのは、当りまえ、ということもできるでしようが、僕はこうして得られた友人をやはり大切なものと思つています。

こんなわけで二年間、部を続けてきたことに僕は、僕なりの意義を見出しているというわけです。

佐藤吉見

早いものである。サッカー部に入ってからもう二年にならんとしている。一年のときは苦しかった。体力がなかったせいだろうか、ひょっとしたら死ぬのではないかと思った時もあった。レーキ掻きで練習前に腰が痛くなった事もあった。四年生に雑用に使われるのではないかと、ひたすら視線が合うのを避けていた。練習を時々サボッては先輩にやる気があるのかと非難された。だからリーグ戦が不成績に終っても少しもがっかりしなかった。そうこうしている内に一年目が過ぎて、新入生が続々と入ってきた。これでこき使われる事はなくなったとホッとしたが、「先輩！」と呼ばれるのはくすぐったかった。新人戦では慶応に勝ってベスト八に入ったが、明治に惨敗した。しかし嬉しかった。東大のサッカー部でも通用することがわかったし、僕自身も大学の運動部員としてやって行けるような気がした。二年後に東大は一部に返り咲くことができるのではないかとも思った。夏合宿はかなり意欲的にやったつもりだ。そのせいか体重までふえてしまい、小西さんにもっとやせろと文句を言われた。リーグ戦は三連勝して二部優勝は実現したかと思わせたが、後はさっぱり気なく例年のペースに戻った。実に悔しかった。やはり勝敗にこだわるべきだと思った。しかし毎度のことだからここら辺が東大の限界ではないかと思い、又三年になれば学問も忙しくなるからそろそろサッカー部をやめようかと思った。僕も遊びたい年頃である。女の子とデートもしたいし、マージャンも飽きる程やりたい。勿論勉強もほんの少しなら喜んでやりたい。しかし、僕はサッカーがどうしようもない程好きなんだ。本郷に進学できるかどうかもわからないのに、春合宿に出ることだけはもう決めている。どうして僕はこんなに馬鹿なんだろう。先輩も皆んな馬鹿だったのかな？

「サッカーに関する書かぬにこした事について」

桝井成夫

サッカーは魔物である。その魔力たるや、人をしてどこまでも連れてゆく、一度、その魔力を断とうとした僕も、ついには、その力故また連れ戻された。なにゆえに、この様な魔力を持つのであろうか。どうも、少なからず抜けた人間をつかまえる様である。それなのに、先輩は、まだまだ僕達は馬鹿になり切っていないとおっしゃるのである。それでも、チームの皆を見ていると、先輩はそうはおっしゃいますが、いい加減みんなひど

いものですよ……といいたくなることもある。ほとほと付きあいきれないという感じさえしないでもない。しかし、僕はもうじたばたせずに、このまま往生するつもりである。抜けている人間は、どうやら抜けている状態が、ベストの様である。サッカー栄えよ！皆様の御健闘を祈り、ここに擱筆します。

だれも知らない僕の気持

田代康之

僕は体力に自信がなかつた。そのため去年一年（二年の時）は、僕にとつて、一年の時、退部していたこともあつて、苦しい一年であつた。サッカーとは、やらないでいると、やりたくてたまらないような気持にかられる妙なスポーツである。そこで僕は、再入部する時、この一年はマイペースで地道に体力をつけようと考えた。それが、他人から見たら不マジメに見えたのかもしれない。しかし、他人がどう思おうが、気にしないように努めた。マイペースとは、僕なりのベストであるはずのものだからである。それが効を奏してか、僕はリーグ戦が終るまで何とか居坐り続け、来年に希望をつなぐことができた。体力もかなりついたと思う。メデタシ、メデタシ！である。

体力への不信のタメ、僕は新人戦等、試合に出るのが不安でならなかつた。しかし試合を見ているとやりたくてしようがないのである。試合は苦しい、出るのはイヤだ。怪我すりや痛いし、OBはうるさい。（この部分削除）この矛盾する感情の板バサミになつて、僕は精神的にも苦しい一年を過した。僕は勝負の世界のきびしさについていけなかつたのである。しかし来るべき年には、もし続けてサッカー部に居坐れるなら、勝負師としての不敵なまでに冷酷な面魂をひつさげて、練習に励んでいる姿を想像するに難くないのではないか。少しキザつぽく言い過ぎたかな。だけど、どうせ僕の気持なんか、みんなにわかりつこないさ。

小原正

明日で試験も終り、故郷へ帰ろうと思つていたら、小西さんから電話があり、闘魂の原稿を書けと命じられた。ところが作文は小学校以来大の苦手なので、もう一日遅く電話がかかつていたのならと残念でした。

今まで一年サッカーをやつて来た、ただ受身的に、何となくという感じで一年を過ごしてしまつた。今考えてみて一番先に頭に浮かぶのは、休みと自分の時間の少なかつたことだ。夏休み、我が住い愛知県学生寮にいる先輩同輩の数は、普段の数百三十五人の十分の一以下の十二・三人「なぜ俺だけが」とよく

思つた。それから寮は二人部屋であるし、じつとして机の前に腰かけていることがきらいだから、夜遅くまでくだらない事を喋つたりしていて、勉強は殆んどやらなかつた。それがばつきり表われたのは大学の最初の試験であつた。もつとも僕は時々さぼつたが、試験の最中にも練習があつたことにもよるかもしれないが（そんな事は理由にならないが）可がたくさんついていた。不可さえ取らなければ、学生としてサッカーをやる資格が一応はある、などと考えたり、クラスの活動から、クラブをやつているからといつて逃げ出したりして、サッカーを隠れみのとして使つて来た。こんな風に自分の行為を正当化しようとしたつて、その瞬間だけのものであつて、あとに何というか空しさのみが残るがそれをどうしようともしなかつた。だからこれからは、自分に正直に生きたい。とは言つてもやはり今までのような生活が続くだろう。それを正そうとしても正せないだろうが、それでもいい。ただ後になつて、今を振り返つた時、大禍なく過ごしたと莫然と思い出すのではなく、こんな生活をしたんだと思い出せるような生活をこれからしてみたい。一週間後には志賀高原で転んだり穴をあけたりしているだろう。まずそれを手始めに、大学の二年生時代を、思い出多き、良き年としたいものである。

〃闘魂〃寄稿

加藤　寛

僕は、現在サッカー部に籍を置いていますが、そもそもサッカーを始めた理由を問い正してみるとはつきりした由来がない様に思われます。ただ兄弟四人、広島の修道高というサッカーの盛んな学校に入り、兄貴からの影響で、五年位から何となく玉を蹴つていました。しかし、中二の時、サッカーの新人戦で人数不足というので、試合に出してもらい少しの間ですが在部し、この時始めてサッカーの魅力らしきものを感じ始めた様です。部をやめてからも、サッカーを学校でやつていたし、学校もサッカーが校技の様なものになつており、運動場に出れば、いつでも玉を蹴れる状態にあつたりして環境的にも恵まれていた様です。ただサッカーの魅力らしきものと口にしましたが、それはまだ漠然として口にあらわされるものではありませんが、ともかくやつていて楽しい気がするのは確かであり、しいて言えば、上品でなく、野蛮でもなくスピードとスリルと戦術上の変化に満ちているといつたら少しはあたつているかも知れません。この様な状態で、東大に入ると、何の迷いもなくサッカー部に入つた状態です。しかし、現在サッカー部に在籍していて最大の悩みは、実力、体力共に絶対的不足の状態にあり、東大

サッカー部が関東リーグで目下厳しい試練の中にある以上、お荷物的存在になつてしまうのではないかという懸念にとりつかれる事です。

さて、次に東大サッカー部全体に対する印象として、他校がセミプロ的状態で、人材、練習機会に恵まれているのと比較して東大は苦境にあると思いますが、しかしそこで安易な妥協をしてはならないし、スポーツにレジャー的要素をとりこんではならないし、真剣に勝負意識を持つ事が重要だと思います。ともかく結果は如何にあろうとも、一戦必勝の信念を全員が常にもつて欲しいと僕は思う次第です。

反省

鹿島文行

三月までは、大学ではサッカーはやらず、学問のみに生きようなどと、大分受験生活の無理がたたつて頭の中がおかしくなつていた僕ですが、四月になつたとたん正常にもどりました。「やるぞ！」――サッカーの魅力は僕をはなさなかつたようです。

でも、四月以来のことをふりかえつてみると、随分しんどかつたと思います。高校の時と相当ちがうからです。まず、駒場から四〇分もかかつて本郷まで行かなければならないこと。いつでも広いグランドいつぱい使つて練習できること（高校の狭いグランドをラグビーなどと喧嘩しながら使つていたのと比べると、夢のようです）。部員が多くて、ボールも沢山あること。合宿が多いことなどです。

大分しんどかつたのに比べて実力はのびず、反省しています。3B（とくにBRAIN）をしつかりしなければと思つています。

サッカー。チーム。個人

駒場主将　古村一郎

修道というサッカーの盛んな学校に育つたせいか、小さい頃からよくボールと遊びました。（この「小さい頃」というのは年令のコトです。念のタメ）中学ではサッカー部に居ましたが、高校の三年間は東大サッカー部を夢に見ながら勉学に励み、体育の授業と遊びのときにボールを蹴る程度でした。それでも広島という土地柄、やはりボールに触れる機会は少なくなかつた方でしょう。当然のごとく？東大に入り、そしてサッカー部に入りました。

東大サッカー部は「一部復帰」という十字架を背に、思つた

よりもキツイ練習をしていました。ボール扱いはともかく、体力に自信のない僕は大いに苦労しました。趣味としては実益を兼ねてパチンコをやる程度で、他にする事もないので、練習にはよく出ました。お陰で駒場のキャプテンになつてしまい、困つています。というのは、僕はもちろんサッカーがとても好きなのですが、生来の性格にもよるのですが、何が何でもボールを奪つてやろう、相手をおしのけてもシュートしようというような気概に欠け、例え新人チームとはいえ、チームを引つぱつていくことなど出来そうにないからです。ことしは何とか、このような試合または勝負へのきびしさを身につけたいと思つています。

駒場のキャプテンなどになると、一応「チーム」というものを考えるわけですが、東大サッカー部には、どうも真のチームワークというものが欠けているように思います。サッカー部だから、サッカーだけやつていれば良いというのも一理ありますが、チームスポーツである以上、また多くの時間をさいて練習している以上サッカーが個人の生活に占める比重が大きいわけですから、もつとしつかりした人間関係があつてよいと思います。そのような深い意味でのしつかりしたチームワークと、勝負への執念があつて初めて試合に勝つことも出来、十字架が十字架でなくなる日が来ると思います。そしてそのようなチームを作つていくごとに、一人一人の部員が、各自の部生活の意義を見出すことが出来ると思います。

初夢

清木俊行

ピリー！　相手側のキックオフではじまつた。相手が我が陣地深く攻めこんできた。右からのセンターリングを強烈にシュート。僕は必死に飛んでパンチしようとした。が足が動かない。かろうじてボールはバーをこえた。今度は攻撃にうつる。ボールを追うが足がついてしまつてボールに追いつけない。ボールは相手にとられて我が陣地にもちこまれようとしている。頭の中では陣地へ帰らなくてはと思うが、足が動かない。再びボールは蹴り出され、僕のもとへ送られる。しかし僕は宙にういてしまつて走れない。あせればあせるほど体が宙にういてしまう…。

いやな初夢だつた。正月そうそうもつとかつこいいプレーをしたかつたのに。でもたぶん勝負には勝つたのだろう。続きはまだ見ていないが。

ある日練習の時、心臓がさけそうで、足も全然動かなくなつた。それで自分でかつてに理由をかんがえ、自分にいいきかせてさぼつてしまつた。練習が終つた後、いつも感じる快い疲労感がその時はなかつた。そしてこれからはどんなに苦しくても

最後までやろうと心に誓つた。しかしまたさぼつてしまつた。そしてまた誓い、またさぼつた。こうして昨年の練習は終つてしまつた。

今年もまたこのようなくりかえしをやるだろう。しかし一歩一歩でも進歩したいものである。誓いの回数をすくなくし、さぼる回数を少なくしたい。自分をいつわらないことはむつかしい。苦しい立場においこまれると、人は何とかその場をにげようとし、自分自身をいつわつてしまう。

その苦しみが少しづつでも自分を成長させてくれると信ずる。多くの人がスポーツにはげむ一つの理由でもあろう。今年も苦しみを受け続けていこうと決意した初夢の感想である。

プロテスタンテイズムの倫理とサッカーの精神

高見　進

資本主義の勃興において、プロテスタンテイズムがその担手となつた中小生産者層に与えた影響は、たとえ上部構造の相対的自己運動とみなすにしても、大きなものがあつたといわねばならない。私の述べたいのはサッカーに代表される近代スポーツが一面において必然的に労働に適した人間を形成するのではないかということである。スポーツが時間を喰うことは一つの要素といえる。そのことで勉強が最低線確保で満足せざるを得ないため、自己思索、自己探究がおろそかになりがちである。又根性という非合理的なものが大きな位置を占める。ルールの遵守の絶対性は社会規範としての法の絶対化をもたらし合法を唯一の正当の源泉と考える傾向がある。以上のことから主知主義の停止がもたらされる。即ち論理的意味連関によつて自分で考えることが少なくなる。これは（有限は無限を包みえないから）「神の意志は分からない」として〝力の経済〟を行い、それを生産力向上にむけさせたプロテスタンテイズムの果した役割に対比できる。ところで私の注目点はむしろ次の点にある。即ちプロテスタンテイズムの世俗内的禁欲は神の栄光をこの世に現すためであるというパターンと練習における忍耐、禁欲は試合の勝利のためになされるというパターンが一致することである。そして前者において目標が神の栄光から世俗的なものに移つた後も禁欲のエトスが近代市民層をおおつたように、運動という立場を離れ会社での仕事を始めた場合でも、忍耐、禁欲のエトスがそれ自体独自なものとして作用するのではないかと思われる。

又理論と実際とは違うという言葉がスポーツにおいては著しく真であるが故に個人において内面化され体系的理論に対して本能的ともいえる反撥をもたらす。さらにスポーツクラブ内では一種の擬社会主義が成立つているため、本質的に階級対立

にある社会において一致団結を説き結果的に資本家の側を有利にさせる面がある。これも神の名において一切の人間の平等平和をうたつたプロテスタンテイズムとの関連で興味がある。勿論相異点も多くある。その一つはプロテスタンテイズムにおいて強く否定されている所の呪術的要素である勝利敗北のエクスタシーである。しかしこれは呪術の根強かつた近世初期とそれのほとんどない現代ということを考えると重要性はないのではないかと思う。その他の相異点については私の関心をはずれるものも多くここでは特に採り上げない。

結論を急ぐと、以上の見解は非常に概観的且つ飛躍的であり単におもいつきの域を出ないことは当然だが、プロテスタンテイズムが中世封建制からの解放と生産力の増大という課題を持つた資本主義の形成を助けたという社会学的に積極的な役割を果したことと較べて、資本主義の維持の機能の一翼を担つているスポーツの役割をここではとりあげなかつたその積極面と共に考え直して見る必要があるのではないだろうか。

鹿　信義

僕がサッカーに興味を持つたのは、小学校五年の時、クラス対抗にハーフで出て優勝した時からです。しかし麻布中学へ入つてからは、陸上部に籍を置き、サッカーは、体育の時しかやらなくなりました。陸上競技がサッカー以上に好きだつたのとサッカー部がなかつたのがその理由です。

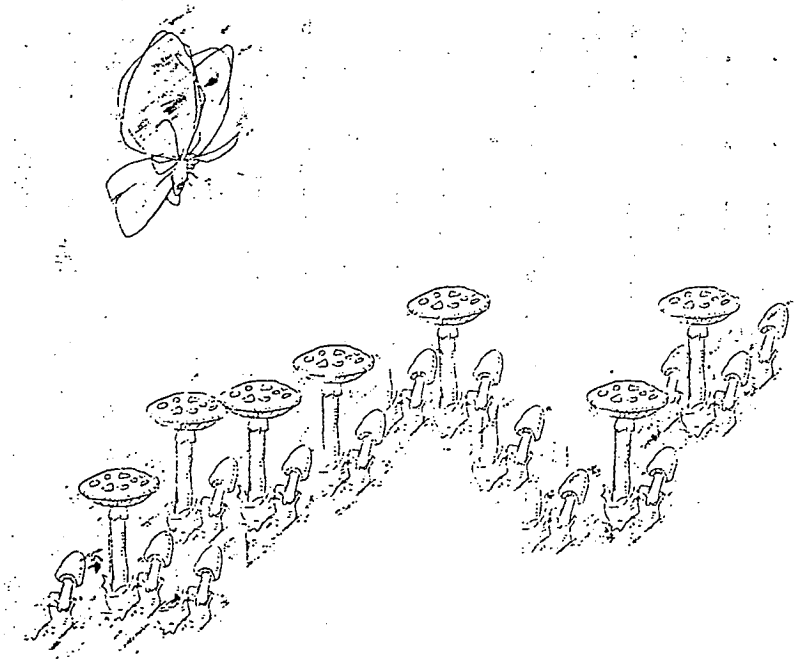
それでもオリンピック後のブームが、我々の学校にも及んで、サッカーが盛んになり、陸上も冬期の練習にもサッカーを大いにとり入れるようになり、サッカーに対する興味も増してきました。

高二の一年間、生徒会活動と私的な理由で陸上からほとんど遠ざかつてしまい、陸上の記録をのばす意欲を失い、高三では、受験体制によつて、もて余した時間に友達とサッカーばかりしていて、この頃、大学でサッカー部に入ることを決心しました。

部に入つたもう一つの理由は、将来中学か高校の教師になりたいと思つているので、その時いつしよにやれる程の技術を身につけたいということです。

部に入つての感想は、非常に雰囲気がいいということです。自由な雰囲気の中で各人が自覚を持つて一つにまとまつているのが、東大のよさだと思います。ただ、上下の間に意志の疎通が少し欠けているように思えます。

僕がいま悩んでいるのは、部の練習に時間をとられすぎて、他に何もできないことです。僕は大学に入つたら巾広く色々なことをやろうと思つていましたが、思い通りに行きません。サッカーだけにうち込んだ人はそれなりに立派だと思いますが、僕自身そうすることには、何か抵抗を感じます。それでも部に入つた以上は、他の部員の足をひつぱらないように頑張りたいと思つています。



サッカー部この一年

小西敏夫

〈新チーム発足〉

一九六六年十一月第二週、新チームでの練習開始。今年から大会組織の改正で、年末のインカレに二部校は参加出来ず、基礎技術とランニング中心の練習。今年のチームにとつて苦しいことは監督・コーチのいないこと。それを逆にプラスとすることが出来るかどうか。例年以上に部員一人一人の自覚が重視される年である。ともかく一年が始まつた。

11・20　東大0－2（0－0）朝鮮大
23　〃　2－0（1－0）横浜国大
27　〃　1－0（1－0）青学大
12・4　〃　2－0（0－0）東京蹴球団

朝鮮大に善戦。前半よく戦つたが、後半動きが少なくなつて敗れる。

〈春休み以後〉

合宿は三学年合同で検見川でおこなう。

3・28　東大1－4（1－2）千葉大
・29　〃　0－1（0－1）ユース

この試合は、前期最高の出来であつた。風下の前半、藤枝の松永にクリーンシュートを許したが、早いつぶしとスライディングで加点させず、逆にしばしば好機をもつかんだが、得点できなかつた。

4・6　東大0－3（0－2）朝鮮大
・10　〃　2－2（2－0）三共
5・6　〃　0－5（0－2）日立本社
・13　〃　4－0（2－0）三菱本社
・14　〃　1－0（1－0）都立大
・21　〃　3－2（1－0）LB
・24　〃　1－0（0－0）青学大

この頃、試合ズレしたためか、沈滞。

〈新人戦〉

5・28　〃　2－0（2－0）商船大
6・3　〃　2－0（1－0）工学院大
・4　〃　1－0（0－0）慶大
・10　〃　0－5（0－2）明大

ベストエイトに残る。慶大戦は快勝。小柳がよく拾いよく攻め、田代、吉崎の二人が健斗して、慶大の攻撃を防いだ。風上の後半終了間際、渡辺のシュートで勝つ。シュート数も東大が多く、順当な勝利であつた。

明大戦は完敗の一語に尽きる。実力的に勝てる相手ではなか

つたが、明治の先取点が早かつたせいもあつて、選手にあきらめが見られたのは残念であつた。

＜国公立大会＞

6・11 東大 4（0－1、1－0）1 水産大（1－0、2－0）

6・18 東大 1－2（0－0）学芸大

ともにまずい試合であつた。水産大戦は、圧倒的に押しまくりながら、FWはゴール前でのスピード不足から点が取れず、BKは水産大唯一のシュートをゴールされる有様。東大の一・二点目はともにPKによるものであつた。

学大戦も立ち上がりの攻勢を生かせず、次第に学大ペースとなり、終了9分前、BKのクリアミスから先取点を奪われ、2分前に小川－小柳と渡つて追いついたもののその直後、CKからゴールされて万事休した。前日、練習試合で日体大に快勝した気のゆるみか、合宿中のタメ、疲れが出たのか？

＜京大戦まで＞

6・17 東大 4－1（0－0）日体大

・26 〃 1－0（0－0）神戸大

7・2 〃 3－0（2－0）京大

GK	永峰	
RB	内藤	
LB	小林	
RH	小西	
CH	小川	
LH	吉崎	
RW	熊谷	
RI	小柳	
CF	中井	
LI	大鍋島	
LW	八林	町林

検見川A面。小雨でよくすべる。立ち上がりから好調。試合前打ち合わせたコーナーキックの作戦が図に当り、前半十三分、右CKを八林が決めて先制。二十七分にも藪内のロビングをGKがはじき、これを再び八林が決め、完全に東大ペース。京大は動きに鋭さがなく、ボールの持ち過ぎが目立つ。東大は後半十八分、中井とのトライアングルパスを通した大町のセンターリングを熊谷がスルーしたあと、小柳がフリーで決め、ダメ押しとなつた。その後もチャンスはあつたが、追加点はなく、そのままタイムアップ。八林の活躍が目立つた。

京大戦としては久し振りの大勝。しかし今年の京大は例年の「荒つぽさ」もなく、確かに弱かつた。試合後の親睦会での浅見先輩の「両チームとも、リーグ戦は苦労するだろう」という言葉が、快勝の喜びの中に響いていた。

＜夏休み＞

検見川で二回、一週間づつの合宿。シュート練習中心。例年ほどランニングそのものの時間は多くなかつたが、やはりつらかつた。

8・12　東大4－1（1－0）富士通

快勝。新たにチームにはいつた坂井の俊足、〈ディグ、熊谷のタテの強さが、中井、小柳、八林とうまくかみ合い出した。

〈リーグ戦直前〉

9・10　東大1－4（1－1）朝鮮大

・17　〃　0－5（0－2）日大

・30　〃　2－5（1－2）三菱重工※

・31　〃　0－1（0－1）法大

10・7　〃　0－4（0－3）古河電工※

※　全日本選手を除く

法大に善戦した以外には見るべきものが全くなく、特にバックスの不振は、リーグ戦に暗い影を投げかけた。中盤で当らず、ゴール前でスライディングせず、敵のFWに自由に回させ、射たしていた。

「青学が早大に引き分けた」「国士館が三菱に完勝した」などという、ウソともホントともつかぬうわさが流れる。そしてリーグ戦を前に、坂井・小林・八林・北川の故障。不安だらけだ。特にバックスがどこまで頑張れるか。いよいよ一年の総決算、リーグ戦に臨む。最後の七週間。

〈リーグ戦〉

10・15　東大4－1（3－1）順天堂大

G・K　永峰

B・K　薮内　小川　吉崎　松岡

H・B　小柳　小西

F・W　熊谷　鍋島　(大町)　中井　大塚　(坂井)

P.KにつくP.Kの乱戦の結果、順天ペースながらも辛勝。立ちあがりから、東大は動きが固く、順天の一方的攻撃となつたが、一五分すぎ小柳のロングシュートが飛んだあたりからようやく盛返し二五分鍋島のゆるいシュートが左にそれるのを大塚がよくつめ、角度ゼロのシュートをキーパーにぶつけて入れ、先取点を取る。三三分にP.Kで同点とされたあと三九分、四三分にともに順天バックスの不用意なハンドによるP.Kを小柳が決め、リードして前半を終る。後半も終始、順天ペースであつたが、一四分順天のP.KをゴールキーパーP永峰が好捕したのが結果的には勝因となり、四三分途中出場の坂井の独走からのチャンスを中井が決めるまで点差の割には苦しい試合であつたが、なんとか第一戦を飾つた。八林のピンチヒッターの大塚の粘り強い一点目と、小柳の中盤での広範囲のプレーが目立つた。

10・22　東大3－0（0－0）成城大

G・K	峰
B・K	内
	川
	崎
	岡
H・B	西
	柳
F・W	谷
	町）
	井
	井
	塚）
	林

G・K	永
B・K	薮
	小
	吉
H・B	松
	小
F・W	熊
	（大
	中
	坂
	（大
	八

圧倒的に押しまくりながら、後半々ばすぎまで得点できず、これまた苦しい試合であった。東大は最初から優勢に攻め、四分に坂井がシュートを決めたが、オフサイド。フォワードはその後数多くのチャンスをつかみながら、フリーシュートを外し、バックスも成城の攻撃に危い場面をみせた。この様な膠着状態が続き『引き分け』ムード浮ぶ中を、後半三〇分熊谷が八林のタテパスを受け独走シュートを決め漸く先取点。これで成城の気力が衰え、三三分ほとんど同じ形から熊谷がよく粘ってシュートを決め、さらに三八分八林のシュートが右にそれるのを大塚が第一戦同様よくつめてプッシュしてダメおし。

10・28　東大1－0（1－0）東京農大

G・K	峰
B・K	内
	岡
	川
	崎
H・B	西
	柳
F・W	谷
	井
	井
	町）
	林
	島）

G・K	永
B・K	薮
	松
	小
	吉
H・B	小
	小
F・W	熊
	中
	坂
	（大
	八
	（調

最強と目される農大に勝った！　台風余波の強いタテ風の吹き抜ける御殿下グランド。前半東大風下。当然六分以上押されたが、この日はハーフバックが好調で中盤せり合に勝ち、バックラインもスライディングを重ねて、農大の細かいパスワークを防ぐ。二五分ゴールに入った小川の好カバーで大ピンチを脱した直後の坂井からのタテパスからチャンスに粘り強くつめていた小柳が鮮かなミドルシュートを決め、これが結果的には決勝点となる。後半風上に立ち有利とはなるが、農大の攻めは前半より球離れが早く遙かに鋭い。農大の早い動きにも、バックスは惑わされしばしばピンチ招くが永峰の健闘、シュートがポストに当たる幸運などで、なんとか農大の攻撃を防ぐ。クリアが次第に小さくなる。時間との勝負。そしてホイッスル・勝った！　見ていてつまらぬ試合だったろうがとにかく勝った。

11・5　東大0－1（0－0）日体大

G.K　峰内
B.K　永藪　川小
H.B　吉小　崎熊
F.W　松中　岡（大　西坂　柳八　谷大　井　井塚）井林町）

三勝無敗同士の対戦は日体大の勝利に終った。はじめて御殿下から離れた為か、日体大を意識してか、東大の動きすこぶる固く、立ち上がり日体大の速攻に全くついていけずほとんどゴール前に釘付けとなる。日体大がシュートミスを繰返すうちに、次第に落ち着きを取り戻し、中盤小柳の活躍からしばしばチャンスを掴み互角の戦いとなる。前半終了間際小川のクリアが坂井にピッタリ合い独走となったが、ペナルティエリアを飛び出した日体大ゴールキーパーの思いきったプレーに阻まれたのは惜かった。

後半も一進一退のうちに一七分ついに日体大が得点した。日体大バックスの攻撃参加から東大バックスのマークが乱れ、バックラインが一線となったため、タテパス一本で日体大の最先端の選手がフリーとなる。藪内がこれを背後からコーナーキックに逃れようと足を出したが、不運にもボールはゴール右隅に突刺さり、今シーズンはじめて、P.K以外のゴールを許した。その後東大はメンバーも変え、最後はバックスも攻撃ラインに参加して懸命に攻め、チャンスもいくつかあったがついに実らないうちにタイムアップ。日体大の得点以後は緊張度の高い好ゲームであった。しかしどんないい試合をしても負けは負けである。敗北感が次第におおいかぶさってくる。

11・11　東大1－3（1－2）国士館大

G.K　峰内
B.K　永藪　川小
H.B　吉小　崎熊
F.W　松中　岡（大　西坂　柳八　谷大　井　井塚）井島）林塚）

連敗し優勝は絶望となる。負ける試合ではなかったが前二試合に比べて緊張感が欠け、結果的には完敗と云われても仕方のない試合だった。立ち上がりはむしろ優勢だったが、前半八分国士館のライトウイングのセンターリングをセンターフォワードがスルーしたあと、ライトインナーがダイレクトシュートを決め先制。完全にバックが壊された一点だった。その後東大もチャンスを何度か掴んだが得点できない。逆に二八分には再び、国士館ライドインナーに得点される。バック

スのマークが外れ、当りが弱くなり出している。しかし四〇分、ゴール前の混戦からのこぼれ球を小西が良く突つこみ、ワイトラップシュートを決め期待を後半につなぐ。後半は東大ペース。八林とのトライアングルでフリーになり、キーパーを引き出しながら慎重すぎてシュートを射たなかつた坂井のプレー、小柳のフリーシュート、バーに当つた小西のヘッディングシュート等々。同点は時間の問題と思われた。しかしこの攻勢で得点できなかつたのが敗因となり三七分の国士館の得点を許し、その後スウイーパー小川までが参加しての攻撃も二点差に余裕ある国士館バックスに防がれ試合終了。スピードのあるフォワードに対する弱さと、フォワードのシュート拙さがあらわれた試合であつた。

11・18　東大2－2（1－1）青学大

G・K	永	峰
B・K	藪	内
	小	川
	吉	崎
	松	岡
H・B	小	西
	小	柳
F・W	熊	谷
	中	井
	坂	井
	八	林
	大	塚

優勝の望みも最下位の危険もなく、新メンバーを組むことも考えられたが結局同じメンバーでスタート。最初から乗気のしない感じのやる気ないプレーが目立ち青学の拙攻に救われる。バックはラインが浅く、しばしば独走を許し、フォワードは肝心な所でトラップミスが出て全くだらしない試合となる。三六分ゴール前の混戦から先取得点されたが四〇分坂井がキーパーのエラーをプッシュして同点に持ち込む。後半六分熊谷が左から独走シュートを決めるが、九分に青学スローインの際のマークの乱れからシュート決められ再び同点。その後も東大がパスワークと云うよりも個人技のみでしばしばチャンスを創るが得点できず。逆に四二分藪内のトリッピングでP.Kをとられ絶体絶命と思われたがキッカーが大きく外し辛くも引き分ける。農大、日体大との試合ぶりの断片すら見えない最低の試合だつた。

11・25　東大2－3（1－0）上智大

G・K	永	峰
B・K	藪	内
	小	川
	吉	崎
	小	林
H・B	小	西
	小	柳
F・W	諏	訪
	坂	井
	中	井
	熊	谷
	八	林

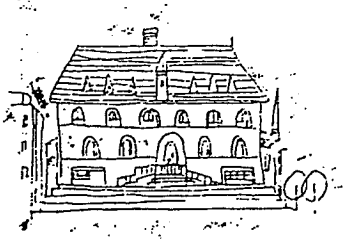
バックとキーパーの出来が悪く最終戦もおとしてしまつた。前半五分に熊谷が浅い角度のシュートを決め楽勝を思わせた。

事実よくパスも廻り良い形になるのだがシュートに今一歩の鋭さがなく追加点できず前半を終る。後半四分コーナーキックより上智のエース伊藤にヘッディングシュートを決められてからは形勢逆転し、苦しい戦いとなる。バックとゴールキーパーの間に落ちたボールをゆずり合ううちにシュートされると云うつまらない形でリードされたあと三〇分にはゴール前の混戦から坂井がヘッディングで決め、その後は一進一退となつた。引き分けとも思われたが四一分上智のライトウイングのミドルシュートで万事休した。終了のホイッスル。すべてが終つた。そしてクラマー氏のコトバを借りれば来年のリーグ戦への長い長い道程の始りである。

〈来年へ〉

日体大戦以後の三試合は全く不甲斐ないものであつた。リーグ戦は優勝しなければ意味ないものであろうか。それにしてもあの様なチグハグなプレー、不本意な試合でこの一年を締めくくらねばならなかつたことは残念なことである。三勝三負一分であつたが完全に勝つた試合は成城戦のみであり完敗は一試合もなかつた。つまり二部リーグ等と云うものはドングリの背くらべなのである。優勝のチャンス、最下位の危険共にない訳ではない。

来年もおそらくそうであろう。ドングリの域から脱すべく技術、走力をつけることを目指さねばならないのは勿論であるが、同じ程度の力の相手に必ず勝つこと、これが二部優勝への道である以上、それらを克服する Something の存在を積極的に認め育てて行くことではなかろうか。



ＯＢ短信

去る一月二十八日に行なわれた納会の出欠に関する返信ハガキの「通信欄」に書いて頂いた記事の一部です。敬称は省略させて頂きました。

○　藤本直秀（大正十五年卒）

躍進を祈ります。

○　木村康一（昭和二年卒）

折角上京するなら納会だけでなく、一時からのゲームに参加したいのですが、二十七日に用事があつて、夜行で行きますし、ここ二・三カ月忙しくて運動もしていませんので、老人の冷水はさしひかえ、皆さんの活躍振りをスネをさすつてながめさしていただきます。久し振りで現部長、安東前部長、竹腰君などの方々はじめ現役の皆さんにお目にかかるのを、楽しみにしています。

○　中島健蔵（昭和三年卒）

竹腰君の祝賀会で久しぶりで多ぜいの方々にお目にかかり、なつかしく思いました。乗富君の逝去が残念です。みなさんも健康第一に。

○　潮　安（昭和三年卒）

昨年末、貴部の名簿その他数々のご案内をいただき、恐縮いたして居ります。三十年前の若かりし時代を、手もとにたぐり寄せるような感にひたつて、皆様方のこのご連絡に感謝いたして居ります。また、貴部のご活躍がひとごとでなく感じられて来ました。

○　林　不二雄（昭和四年卒）

大正十三年に始まつた第一回の大学リーグ戦に出場したＯＢですが、此の頃の了式蹴球の発展振りは只々驚嘆する許りです。益々進歩発展を祈ります。当時は、国との国際試合など思いもよらぬ事でしたが、在京の外交団とか横浜の外人クラブなどと親善試合があり、それは格別の楽しい集いでもありました。

○　木村久男（昭和九年卒）

三十三年勤務致しました三菱電気を昭和四十一年十月に退社致しまして、成蹊大学に勤務して居ります。仕事が変つたせいか昭和四十二年九月には四十年ぶりで病院生活を送りま

したが、もう殆んど平常に変らない程度に回復致しました。

○ 稲川　達（昭和十二年卒）

サッカーブームも結構だが、今のマスコミの様な取りあげ方をされると、私の様な天邪鬼は寧ろレジスタンスを感じています。地方に居ると専らテレビで試合を楽しんでいます。

○ 後藤典夫（昭和十四年卒）

大阪に居るので残念ながら出席できませんが、皆様の御健康と御活躍を祈ります。よろしく。

○ 笹間正義（昭和十六年卒）

サッカーは技術七十％、後の三十％は部誌の名前通り闘魂。東大サッカー部は練習量も少いので頭脳プレーと斗魂で補うべきと考えますが、現役諸兄もう一ふんばりして下さい。

○ 種田憲次（昭和十七年卒）

サッカーが盛んになるにつれ東大チームはどうしているかと心にかかるのが地方部員の気持です。御健斗を祈ります。

○ 菊池武爾（昭和十七年卒）

グランドに出るではなし、応援に行くではなし、会にも出ないし、誠に申し訳なく思つて居ります。然し酷乍らいつも心のなかでは応援しています。華やかだつた我々の時代に比べて今の部員諸君は何かと大変な事だろうと思いますが、不屈の斗魂をもつて「サッカーに徹した生活」（我々がいつも先輩に云われた言葉です）をする様頑張つて下さい。

○ 有泉俊亮（昭和十七年卒）

近頃のサッカーブームは驚く程で御同慶のいたりです。サッカーのルール等を説明して悦にいつています。もうプレイは出来ませんが、部のマネージャーの方が小生の小学校の同級生の息子さんだそうで年をとつたものだと思いました。

○ 大貫雅徹（昭和十九年卒）

社用のため欠席します。日頃多忙な毎日を送つているので、ついついご無沙汰続きで失礼して居ります。〃闘魂〃第二号期待して居ります。近頃はサッカーブームですが、本学が昭和十七年頃から二度目の黄金時代を迎えて全国制覇をしたりして強かつた頃の新聞記事を全部スクラップして居りますから御利用下さい。

○ 斉藤賢吾（昭和十九年卒）

毎度お便り有難うございます。毎度当社とお手合せ願い度

いものです。

○ 加藤信幸（昭和十九年卒）
現役の皆さん、サッカーのよさ、面白味、醍醐味が分るまでやりぬいて欲しいと思います。

○ 村瀬隆二（昭和二十二年卒）
皆様のご健勝とご健斗ご発展を祈ります。

○ 松元五郎（昭和二十四年卒）
小生達二十三年優勝したのですが、その頃の先輩が来て居りましたら小生四十二年四月東京に舞い戻った旨宜敷お伝え下さい。末乍ら諸兄の御活躍を祈って居ります。

○ 三輪嘉晟（昭和二十七年卒）
雪深い片田舎に閉ぢこめられているためすっかり御無沙汰しておりますが、最近のサッカーのおかげでビッグゲームをテレビを通じて楽しんでいます。又工場サッカー部のメンバーとして活躍？していましたがそろそろ限界に来た様です。諸先輩によろしく。

○ 坪田亜規良（昭和二十八年卒）
東大サッカー部の一部復帰を期待しながらテレビにてサッカーを楽しんでいます。なお、昨年末東洋紡庄川工場の風間幸介君（三十三年卒？）が出張中自動車事故にて逝去。前途ある人だけに惜しまれてなりません。

○ 新倉雄三（昭和二十九年卒）
特に支障の無い限り出席致します。十数年ぶりに御殿下でボールをころがしたいとも思っています。

○ 小林昭夫（昭和三十三年卒）
入社後十年、ずっと横浜の工場勤務。土曜が半ドンでない為、現役諸君の試合、練習を応援に行けないのが残念です。サッカーの普及と、東大の活躍を心から祈っています。

○ 水谷幸弘（昭和三十五年卒）
先輩（とくに監督さん、コーチ）の努力に報いて下さい。スポーツはやはり勝つためにするのです。

○ 福田泰二（昭和三十五年卒）
東大の中にいながら、先輩諸兄にも現役諸君にも御無沙汰ばかりで申し訳なく思っています。　近年は雑事に追われどおしで、

ボールを蹴るのも月に一度ぐらいという情ない状態になつてしまいました。今回も仕事のため失礼しますが、次の機会には参上したいものです。本年度御発展を祈り上げます。

○ 高場直年（昭和三十六年卒）

諸先輩に色々とお世話になりながら、後輩に恩返しも出来ないまま地方へ来てしまい、申し訳なく思つています。我々の現役時代はいわば利殖時代で、一部から落ちたてながら、いつかは復帰できそうな成績でしたが、今では二部の低迷時代。情ないとは思いますが、三部に落ちないように。

○ 高嶋伸享（昭和三十七年卒）

前略御免下さいませ。息子伸享の事につきましては常々何かとお世話様になりましてありがとう存じます。実は前述の通り本人が只今イギリスに留学中の為何のお手伝いも出来ず申し訳ございません。四十四年夏頃帰国の予定でございます故。

○ 藤井俊治（昭和四十一年卒）

ご苦労様でした。

来年も頑張つて下さい。

「闘魂」を楽しみにしています。

○ 沖邦雄（昭和四十二年卒）

リーグ戦を一度も応援に行けず、申し訳ありません。三連勝してあと一度も勝てないというのはどうしてなのでしょうか。

北九州は夏は暑く、冬は寒さが厳しいところですが、人情はこまやかな住みやすい土地です。九州のサッカーの水準はまだまだ低く、八幡製鉄を除いては三菱化成がトップクラスという状態でなかなか良い試合を見られないのが残念です。では皆様によろしく。

記

乗富文夫（昭和四年卒）、風間幸介（昭和三十四年卒）の両先輩が昨年逝去されました。つつしんで御冥福をお祈り致します。

なお、次のようなハガキが寄せられたのでお伝え致します。

「母校のサッカー部の活躍を非常に期待して居りましたが、夫風間幸介は昨年十一月八日、交通事故にて他界致しました。生前の御厚情を感謝致しますと共に、今后の皆様の御発展を心からお祈り申しあげて居ります。」

風間富美子

昭和四十二年度サッカー部員

（昭和四十三年三月一日現在）

4年

小川恭二　工・船舶　三菱重工　小田原
小西敏夫　経・経済　伊藤忠商事　教大附
小林将志　工・土木　大成建設　教駒
中井省　法・政治　大蔵省　立川
中尾捷　工・航空　大学院　麻布
熊谷貞俊　工・電気　大学院　雄
諏訪勝久　経・経営　富士通　立教
坂井忠昭　教・教養　三菱商事　修道

3年

石田祐幸　経・経済　麻布
大塚隆　工・建築　教駒
大町達夫　工・土木　日比谷
加納研之助　工・応物　麻布
北川薫　教・体育　旭丘
小林喜一　農・畜獣　日比谷
友定正治　法・公法　広大附
永峰富一　工・建築　日比谷
鍋島厚　経・経済　戸山

松岡誠也　工・電子　日比谷
八林秀一　経・経済　日比谷
藪内俊和　法・政治　戸山

2年

武田厚　文Ⅰ　日比谷
小柳望　理Ⅱ　小石川
吉崎英雄　文Ⅰ　小石川
渡辺彰　文Ⅱ　教駒
山田知良　理Ⅰ　麻布
佐藤吉見　文Ⅰ　教駒
斜井成夫　文Ⅲ　広大附
小菅恭彦　文Ⅰ　栄光
田代康之　理Ⅰ　日比谷

1年

石井幸一　文Ⅰ　教駒
小原正　理Ⅰ　旭丘
加藤寛　文Ⅰ　修道
鹿島文行　文Ⅰ　日比谷
古村一郎　文Ⅰ　修道
桜井英人　文Ⅱ　武蔵
清木俊行　理Ⅰ　修道
高見進　文Ⅰ　甲陽
鷺信義　文Ⅲ　麻布
井上純威　理Ⅲ　雄

42年度決算

収入		支出	
運動会	183,000	ボール代	163,100
学友会	96,000	ユニホーム	46,150
基金利子	167,320	その他用具	11,330
広告宣伝	20,000	加盟費・その他	44,610
部費収入	39,285	通信費	36,627
前期繰越金	70,679	治療費	7,517
その他	76,602	京大戦費	62,370
合計	1,026,361	レモン代	8,860
		その他	92,285
		合宿費	518,824
		合計	991,676

43年度への繰越金は　26,685円です。

名簿の訂正

番号	氏名	訂正事項
3	田中二郎	住所 世田谷区北沢 → 世田谷区代沢
65	斉藤五郎	住所変更 船橋市海神町4丁目5の4 電話 0473-31-1318
81	三井忠夫	昭和22年へまわす。
105	広渡浩美	住所変更 杉並区大宮前3の96 電話 334-4386
125	林文二	〃 世田谷区駒沢2丁目33の14
139	種田憲次	種田憲治 → 次
189	松本五郎	住所変更 都下北多摩郡狛江町猪方922 菱化アパートB2-106号
231	浅見俊雄	〃 横浜市戸塚区上郷町亀井2034
264	西尾元宏	〃 川崎市戸手本町2-195 明治製菓社宅
277	長浜毅	〃 世田谷区深沢4-16
279	斉藤次郎	〃 杉並区高円寺南1丁目28の19 加藤コーポ41号 電話 312-5106
286	内藤隆史	住所訂正 世田谷区代田4丁目8の13
311	樋口周嘉	住所変更 名古屋市昭和区川名山町68
315	武田勝年	〃 港区六本木6丁目10，4の405号 電話 401-8209
324	沖邦雄	〃 北九州市八幡区東王子町2 三菱化成明和寮 電話 62-0261
328	島田厚二	訂正番地 2-149 → 2-491
	堀田嘉幸	住所 福岡市多賀1丁目14の11

編集後記

小西

○ 部誌なんて作るの何でもないさ。原稿集めて校正して、印刷屋に出せばいいさ。ところが、この程度の部誌ですら結構大仕事。いわんや創刊号おや。創刊号編集者の努力に改めて脱帽。

○ まず原稿集めからしてうまくいかないのである。ある時催促のタメ、同じ内容の電話を三十回続けてかけた。喫茶店の赤電話を利用したのであるが、そばの女の子が、そのたびに笑っていた。(この女の子はボクとは何の関係もありません。念のタメ)結果的に、これだけ集まったのは奇跡に近い。

○ 編集責任者を引き受けた。「今度はひとつ、中尾の力を借りないでやってみよう。」この決心の甘かったことを認識するのに長い時間を必要としなかった。要するに中尾がいないと何も出来ないのである。時に生意気なコトを言い、人使いも荒いようだったが、いいマネージャーだったぞ、彼は。リーグ戦直前まで監督コーチなしで奮斗したヤスキヤプテンとともに、このマネージャーにみんな拍手をしましょう。

○ 責任者であるボクが多忙なうえに、気が弱くて(重要な註。これは真実である。世に広く伝えられる誤解を解くために、あえて強調する)人にもあまり頼めず、結局雑な仕事となってしまった。創刊号を読み返すにつけ、「こんなことでいいのか?」と深刻に悩む。第三号の編集陣は、ボクたちに大いに感謝せねばならない。

○ 今度の仕事で感じたこと。文字の汚なさ、文章の拙さ、誤字、あて字の多さ、内容の乏しさ、表現の稚拙さ。いずれも部員の原稿のこと。東大サッカー部の国語力の不足は、走力のなさとともに重要問題である。ボクが推理小説の愛好家でなかったら、これらの原稿の文意をつかむことは不可能であったであろう。

○ 改めて創刊号の偉大さを知りました。でもこれで第三号以下が出し易くなると思います。

(中尾)

サッカー用品専門
スポーツ服装

有限会社 **ヤンガースポーツ**

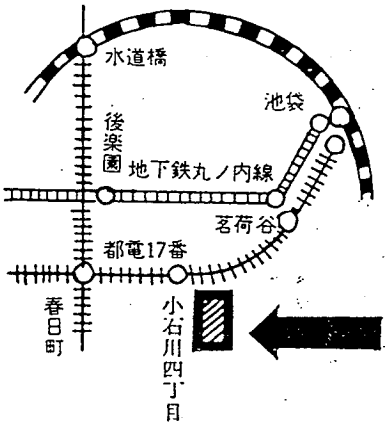
東京都新宿区新小川町２－９（大曲電停前）

TEL（269）1480・1549

Y. OGAWA

全日本代表選手から中学生まで
御愛用願っている

ヤスダの
サッカーシューズ



●営業品目
サッカーシューズ
ラグビーシューズ
ハンドボールシューズ
アメリカンフットボールシューズ

株式会社 ヤスダ

都電　小石川4丁目又は小日向4丁目下車
地下鉄　池袋線茗荷谷下車

東京都文京区小石川4丁目22番1号
TEL813-5761～3代表(811)2548(夜間直通)

御一報しだいカタログ郵送いたします